

## 史料紹介 森本州平日記（十一）

東京大学大学院  
日本近代政治史ゼミ

### はじめに

今回翻刻する森本州平日記は、一九三二（昭和七）年四月一日から六月三十日までの三か月分の日記となる。これに先立つ年の「史料紹介 森本州平日記」については、紙媒体では『東京大学日本史学研究室紀要』第二十二号所載「森本州平日記（十）」まで掲載済みであり、また東京大学学術機関リポジトリ（UTokyo Repository）では同号まで閲覧できる（<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/> / 画面左のインデックスツリーで人文社会学系研究科・文学部を選択の後、日本史学を選択）のでご覧いただきたい。

本号所載の日記について、その時代背景と内容の理解のため、今回は塚原浩太郎氏による解題を付した。日記本体とともに解題も参照されたい。

翻刻には、日本史学研究室の佐々木政文、賀申杰、佐藤大悟、章霖、

三村佳緒、路平、塚原浩太郎、石坂桜、上西晴也、谷川みらい、桑田翔、太田知宏、飯島直樹（以上、大学院生）、太田聡一郎、渡部亮、西水悠理（以上、学部生）の諸氏のほか、玉木寛輝（慶應義塾大学大学院法学研究科・助教）、姜多映（人文社会学系研究科韓国朝鮮文化研究室博士課程一年）にご協力いただいた。語句の説明には、賀、章、三村、路、塚原、石坂、上西、谷川、桑田、太田、飯島が当たり、翻刻の最終盤のチェックを賀、三村、塚原がおこない、全体の調整と最終確認には飯島があたった。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体を新字体に改め、不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、個人の評価にかかわる問題を含む人名等は\*\*\*等とした。

最後になりましたが、森本州平日記を、東京大学文学部日本史学研究室の学生・院生が自由に読み翻刻することを許可され、翻刻文について丁寧にご助言下さった、日記原本所有者で現森本家当主の森本信

正氏に厚くお礼申し上げます。また、常に惜しみなく尽力くださる飯田市歴史研究所調査研究員齋藤俊江氏にも厚くお礼申し上げます。

(加藤陽子)

四月一日 金曜

快晴。陽春の気増し暖にて、おねり祭の催も、ものの沢山出て各町此不況時に祭礼は賑々し。下女等を見物にやり母も子供を連れて午後上飯す。銀行は業務を午前中にて片付けて、各行協議の上適当に休業する事とせり。おねり祭は始めの中は上海事変等もあり特に不況時代に此様な御祭騒きは中止説等もあつた様だが、遂に決行する事となり各町屋台等出てチン／＼ドン／＼の音賑かなり。午後四時頃帰宅して家居し室内の平素の乱雑を整頓せり。

菊太郎家敷を松島孫一より坪二円にて、資金を富田より借入れ買取り、孫一には小作地(重応の家の西)一反歩を割譲して屋敷を定める事と決し、菊太郎には不利の条件なれども承諾してやる。

社会の今日 おねり祭。

四月二日 土曜

快晴無風。おねり祭りの好適日にて風もなく暖なり。同しく午前中にて銀行の業務を中止して、町の様子を見るべく広小路を通過せんとすれば混雑甚しく通行も出来ず、裏町を辛ふして村田屋に詣れば、喜代、良一等居合せ大元居士も居りて、共に同家庭にておねり祭の状況をみる。同家主人と話せしに三日の下見に是非京都迄同行せられたしとの事にて、急き家に帰りて、竹泉堂小池慶治郎を会(介)して頼み置きたる北岡主催の京都美術倶楽部の売立の下見に上柳喜右衛門と共に

に出かける事に決し、午後五時飯田発大平峠越にて上柳と同行せり。大平峠には未だ雪多く道路悪し。午後八時三留野発、名古屋を経て翌朝午前四時京都着の予定なり。

急に思付きたる京都行にて家でも不思議に思へり。

大平神職を頼みて弁天様の御祭をかね御衣更をなす。

午前四時半京都着、大津屋を訪問したるに断られたれは千切屋に転して宿す。

四月三日 日曜

快晴。午前四時千切屋に夜宿泊して夜行の疲労を医す。午前十時北岡商店を訪問したるに既に美術倶楽部へ出向したる後にて二円の手土産を出して去る。美術倶楽部に行けは小池慶治郎、北岡等居りて面会す。尚信作も来り合して陳列せる書画道具等を見るに、始めより自分に惜しき心なければ一物も欲せず観(鑑)賞に任す。呉春、清暉等の筆、景文等の筆も多し。道具類にもよきもの沢山あるらしけれども骨董品として眼識を備へされは面白からず、巡回する程に之れとも特別に優物とはなく、真偽不明なるもの沢山なり。始めて売立を見たるものなれば、始めの間は手により物色したるも数多ければ眼疲れて致方なし。午後二時半にて美術品看(鑑)賞は止めて上柳、小池、信作と四人にて比叡山に参る事とし、ケーブルにて登山、大講堂等を見て坂本に下山し、電車にて大津を経て三条に帰り、小池と打合したるに祇園の都踊を見たしとの事に三人夜食後つれ立ちて見るに美しきものなり。見料三、五〇、高し。夕食を各自宿にとりて再び大津屋に小池を訪問し祇園見物をなし、終つて観月へ行きしも(木屋町通)転して雪家に行き、更に花千代大平樂より松梅の松之に至りて、上柳と共に

京都の情調を見る。

【語句の説明】 祇園の都踊：毎年四月一日から一ヶ月間、祇園の歌舞練場で催される舞踊。一八七三年の第一回京都博覧会から始まった。

#### 四月四日 月曜

晴。朝九時帰宿す。宿の女中笑ふ事しきりなり。朝沐浴をして大津屋を訪問し小池に会いて嵐山の焼物の分与をうけ、美術倶楽部に売立を見る。其の呼売の状別に飯田と変りなし。競喚人多きため一時に呼び出すのみ。其の現状何貫匁と云ふあり、何両と云ふあり、何枚と云ふあり、両と枚とは金六十銭なりと聞けり。朝七時より売立始め二千五百点を呼売りして入札にかゝるとあり、故に開札は午後ならんと云はれ午後一時半迄居りしも、小池及上柳に辞して帰途に付き、物産館にて菓子、下駄等を買ひて午後二時半汽車京都出發して彦根に下車、直に多賀に來りて多賀神社に父の病氣全快を祈りたり。時に神社は建築中にて仮御殿なり。悠々普請を見て後夕食をとり、再ひ彦根に歸りて名古屋行にて午後九時名古屋着、市中を見物して午後十一時五分發にて辰野に向ふ。疲労したればよく眠る。

【語句の説明】 美術倶楽部に売立を見る：美術商の同業組合である京都美術倶楽部ではこの日、京都市や松山市の家で旧蔵されていた美術品の売り立て（品物を決まった期日に一時に売り払うこと）が行われていた。

#### 四月五日 火曜

晴。朝八時半八幡着、直に組合支所に行く。養成工女試験終了し、其の採点に関して志願者四四名の内廿五名を採用する事と決し夫々通

知を出さしむ。生糸暴落しA格六四〇円位以下なり。午前中役員会を開き蚕種家と蚕種価格の交渉に付き組合と蚕種家との間の交渉に付組合は一瓦五銭、蚕種家は五錢五を主張して譲らず、遂に五錢五厘と協定する事とせり。其他英蘭買入、繰糸の事等につき協議し、序を以て明年飼育すべき品種を決定する事となり、蚕業試験所より松田氏來るに付其意見を聴きて決する事とし、遂に春17×105、17×14、夏□□、秋平和安泰を奨励品種とする事を決して夫々蚕種家へ通知する事とせり。午後家族会あり臨席して一場の挨拶をなし組合にてなし居る事を説明せり。午後五時終了して歸る。婦人連中150名計り集る。大沢女史退学の由を予に告ぐ。

【語句の説明】 蚕業試験所：長野県蚕業試験場のことか。蚕種の試験・調査研究・配布および蚕業の技術講習を担当する機関。一九一二年四月に長野県庁蚕糸課のもとで設置した蚕種製造所を前身とし、二三年一月の府県蚕業試験場規程の公布によって蚕業試験場に改名。一九三二年当時上田や松本、飯田に支場が設置されていた。

#### 四月六日 水曜

晴。久しく雨〔降〕らず飯田地方は井戸水涸渴せり。朝銀行に出頭す。正午辞して組合に歸り、組合員家族会に臨みて一席講演を行ふ。一時間に及び組合のなしつゝある仕事に付説明し最後に精神的報徳教の事に付て話せり。蚕業試験所より松田技手來りて今日も養蚕技術につきて話せり。後難波節ありて午後五時終了す。後より組合の金融上の難局に関して青山専務より内話あり。又蚕種家石原、保阪等を喚集して組合と蚕種家との間の蚕種協定に関して組合の態度を告げ、最近て〔は〕指定蚕種家を召集して17×105ツヤ消し、春蚕とし、夏は□□

□□、秋は平和安泰の種類を以て奨励蚕種とする事を告げ、それを供給すべく努力せられたしと組合の方針につきて告げたり。組合より米の売上勘定をもらい来る。

信也上京出発す。

#### 四月七日 木曜

曇雨。午前九時裁判所へ富草館事件に関して小泉市太郎が原告となりて森岡信吉等に対する求償権の問題に付証人として喚問をうけ、其の喚問に応じ上飯、出頭す。未だ時間早きに付、金田の病気の為在宅せるを見越して訪問す。幸大に軽快となりよく談す。暫くにして公判廷開くに付、金田の所へ迎への者来りて其由を告ぐれば直に出頭す。始め出廷せしに村瀬氏一人のみ残して他の証人は退廷せしめ、順次喚ひ入れて訊問す。予は恩沢新八郎の次に入廷して裁判長の訊問に答ふ。其要旨は、百十七銀行は大正十二年中富草館事件に付組員全部に支払命令を付せし事ありや、然り、此事件につき村の平和の為とて恩沢新八郎、宮下仁英の兩人が口をきき、百十七銀行の債権二万円余を六千五百円にてマケ和解せし事ありや、然り、其時小原与惣は求償権を行使せずと云ふ約束なりしや、然り、協定書に記載しなきは何故か、之れは紳士協約にて平和の為と云ふから銀行としては此の如き譲歩をなしたるなり。之にて終り退廷し日当旅費等の支給をうけて帰る。代田弁護士を招きて吉田信陽館との取引事件につき質問す。

予記 宏左足首を膨らし痛む。増患腹痛す。父、吉川医を招きて診察。奥庭のドーダン移植。稲、久等来る。朝伊久間の横村氏来訪。

社会の今日 上海停戦協議早速まとまらず。決裂せんとするもよう。

【語句の説明】①富草館：大正期に下伊那郡富草村（現・阿南町富

草）で製糸場を運営していた業者。一九二〇年八月、大富館製糸と合併して大成生糸販売組合大富館となったが、二四年に再び分離した。

②上海停戦協議早速まとまらず。決裂せんとするもよう：三月三日に中国軍が退却し戦闘中止声明が発せられ、国際連盟臨時総会は停戦交渉開始を強く勧告した。上海ではイギリス公使の斡旋により同二四日から停戦本会議が開始されたが、日本軍の撤退時期をめぐり交渉が難航し四月一日に一時停頓した。翌二日、中国代表の提訴により召集された十九人委員会の決議や英米仏伊代表の仲介により、五月五日に停戦協定が成立した。

#### 四月八日 金曜

小雨晴。午前中組合に出頭して江塚に面会し組合経営上に付打合を行ふ。其件次の通り。木下房吉を製糸部より信用整理に廻し小木曾を製糸部張場へ出す。整理は此際時効を中断し置く事、徒に債権の請求をなすも何の効果もなきに付此際は組合債務者を悪化せざる様になし置く事、農山漁村低資は信用の三分の一を強制的にしても借替せしむる事、青山案（返り書を出して多数組員の調印をとる事）は此際差控へる事、等の打合をなす。青山此頃仕事に付心配してイヤ気を起し居れり。銀行も検査を初める事とし上伊那支店を十一日より執行確定す。

午後吉田組合へ預金払戻に対する債権提供の件につき吉田組合へ行き数名の役員と懇談して午後六時帰飯し、西上柳の千代田商會總會に出席す。大平より社長辞退の旨申出あり。之を承り置く事とす。注意すべき事項沢山あり。要は保険勧誘員の為に食はれる事なり。立替金の如きは皆之に属するものなり。敏雄の人好しにも困る。

牧内伯母来訪せり。

【語句の説明】①農山漁村低資：政府は一九三〇年、農村救済策として各府県に割当額を定め総額七千万円の低利融資を行う方針を打ち出した。松尾村はこの農山漁村失業救済低利資金から九万五千三百円を借り入れ、同村産業組合に転貸していたが、三一年一〇月に大蔵省の事務官が来村調査し、使途が問題視されていた。

②吉田組合：下伊那郡市田村吉田（現・下伊那郡高森町）の産業組合。下伊那生糸販売組合連合会伊那社には、一九二〇年の設立と同時に加入した。

#### 四月九日 土曜

快晴。前沢智恵子の葬式あり。朝銀行へ立寄りて後午前十時卅分発。桜町より会葬の為出張す。香奠及菓子折一個忌中見舞として携帯せり。快晴にて暖なれば食後縁側に出て、雑談せり。春々永し。葬儀は午後二時より親類のもののみよりて行はれたり。式後忌中明の儀あり、夕食の膳出て之を喫して各自退散す。前沢の下男、守田、春日の兩人を見送りに行きて田島駅にて倒れ大騒となり、女子供の泣き叫ぶあり哀れなる場面を生したり。之を見て午後八時頃帰宅せり。市場鹿太郎来訪して、彼の家族の間に於ける養子養女問題に付鹿太郎と喜代との間の意志疎通を計られたしとの依頼ありたり。

牧内伯母来訪して滞留す。父精神過敏となり居り神氣昂貴し居るもの、如し。竹仙堂〔竹泉堂〕より竹堂の鹿の幅一〇〇、光琳お福の画八三円となりたる旨報告ありたり。

【語句の説明】光琳：尾形光琳（一六五八～一七二六年）。元禄期の京都で画家、工芸家として活躍。作品を通して装飾的で華麗な表現の

世界を築く。明治初期に海外から装飾芸術家として注目され始め、明治後期には日本国内でも光琳を中心とした装飾芸術が再評価され、元禄期の装飾模様が流行した。後に琳派と呼ばれ、昭和初期には琳派ブームが起こった。

#### 四月十日 日曜

快晴。桜咲く。七分の開きなり。牧内伯母滞留す。炬燵を取払ふ。組合支所より本所行、本所の事務を見る。市瀬牛太郎を招致して先に約束したる毛質の工場統一反対派と会見せんとせしに次の理由にて其会見を延期す。本年は生糸価の暴落A、十四、六〇〇円なれば米作増加し生繭の生産額は三割減に陥るべし。若し一ヶ年の生産額四万五千貫位とせば到底本、支両工場を以て此線糸をなす能はず、何れか一方に局限せらるべし。果して然りとせば支所にあるべし。然らば本所は自然に廃する結果となり毛質としては不便となるは必せり。故に本年の内に工場統一を先して主唱せらるゝ方可なるべしと予は論せり。故に毛質としては如何なる態度をとるかを詰める事とせり。本日毛質硬派と会見を見合せ惣代会に於てする事とせり。再び支所に帰りて蚕種家と会見して本年飼育の蚕種代一瓦五錢五厘協定に決したる事、指定蚕種家淘汰の方針等を話し、酒を出して蚕種家を勞ひしに酒を呑むもの少し。来組したる蚕種家は十名計りなり。明年飼育の蚕品種に付ても上記の如く話す。

予記

春 歐一四

支一〇五

夏 一一〇×一〇五

秋 平和×安泰

発信 勝男、光弥の就職ヲタノマル〔毛賀の木下家〕。代田喜一郎、退職通知に対し返。

【語句の説明】市瀬牛太郎：一ノ瀬牛太郎。松尾村村会議員（一九二五～二九年）、毛賀耕地委員（一九二四～三〇年）、土木委員（一九二六～三二年）を務めた。

四月十一日 月曜

晴。朝七時廿八分発て辰野支店検査に向ふた。随行は吉川と木下の二人である。午前九時に辰野へ着いて直に検査にとりかゝつた。主に貸付金整理に関する件であつて、研究して整理を速（促）進すべく打合を行ふた。午後八時終了して下諏訪行、富ヶ岡の別館に止宿して入浴し、春雨に煙る湖面を眺めて一夜の清遊を試みた。翌朝明神様に参詣して伊那町へ行く予定であつた。富ヶ岡の一夜は実によい気持ちであつた。湖面の上で漁船の三四艘出漁するも見へ、上諏訪より対岸の村落も雲煙の間に見へて此景を貪る事が出来た。

四月十二日 火曜

雨。下諏訪明神様へ参詣した。参宮通がセメントで堅められて居た。出征兵士の見送の旗々、向つて左側に沢山立てられて居た。又高階宮司の書として「日本第一大軍神」の旗か樹て居た。駅で青柳大佐と会ふた。

伊那町に来て伊那支店を検して午後六時雨中を高遠へ向ふた。

伊那依託倉庫を検したが、倉荷証券に引合せしに繭と之に代るべき生糸の量少し。重役又は責任者居らず、明日責任者と立会の上再検査すべしと告げて去る。吉川に検査を命ず。吉川は荷物の量の少なきを報告せるを以て改めて高遠の帰途再検する由を依託倉庫の番人に告げて去る。

【語句の説明】①下諏訪明神様：諏訪明神は信濃国一之宮の諏訪神社の通称。全国の諏訪社の総本社であり、上社前宮・上社本宮・下社春宮・下社秋宮の四つの社殿からなる。一九二六年官幣大社に昇格。戦後、諏訪大社に改称した。

②高階宮司：高階研一（一八八五～一九六七年）。兵庫県出身の神官。一九一四年丹生川上神社宮司任命以後、各地の宮司を歴任。一九二七年八月から三六年一二月に依願免職となるまで諏訪神社宮司を務めた。一九四二年榎原神宮宮司となり、死去まで在任した。戦後は神社本庁事務総長や国学院大学理事を歴任し、神社界の重鎮として活躍した。

③青柳大佐：青柳準之助。長野県出身、陸士四期卒。重砲兵第四連隊長などを歴任。一九一六年砲兵大佐、一七年予備役、二五年後備役。

四月十三日 木曜

晴。夜来の雨晴れたれとも相当寒し。早朝起き出て、木曾屋を出て木下と二人にて公園を散歩す。名物の桜花末た蕾を破らすと雖も夜来の雨にて古木の苔青々として見事なり。却て爛漫と咲き誇りたるより面白し。土族の家屋らしきもの二、三軒もあり、古の城郭の跡、石垣濠、要害の地等封建時代の俤はれて面白し。宿に帰りて朝食を了し

高遠支店を検査せり。午後一時中止して組合理事会に帰る。午後三時より本所に於て開かれたる開会に間に合ふ。途中松下に会い清和会ある由を聞く。理事会は惣代会開催に関する件、低利資金を信用貸に振り替へ貸付の件等なり。終つて天竜峡ホテルで清和会に出席したるも既に会は終了したれば、林雅次に会いて御馳走は金にて払ふ事を約して帰る。電車中原耕太郎と話して八幡駅迄来り。闇き道路普請中をたとりて帰宅す。

予記 八幡橋木道路は昨年中第一期として八幡駅、組合支所前迄出来、残りを全部五米突に拡大する事となりて工事中なり。工費四千四百円なり。其内一部を寺所にて請負、残りを新井の地元請負とし猪佐雄之をうけて評判悪し。

社会の今日 上海出兵帰路に付く。

【語句の説明】①天竜峡ホテル：天竜峡姑射橋の袂に存在していたホテル。大磯海岸にあつた徳川頼倫の別邸を移し、旅館として改築した。

②林雅次：南信新聞専務、同社長などを務めた。

#### 四月十四日 木曜

快晴。朝七時出発。宮田支店検査に向ふ。行員吉川、木下は先着し居れり。伊那依託より松沢、明尾の兩人来店し倉庫の内容品欠乏に付之れが釈明に来る。則ち当方としては生糸一七〇〇斤、繭四〇石あるも之に該当すべき約四七〇石の繭なき為、之れに充当すべき繭又は生糸を備付け置くべき旨を告げたり。先方は来る四月廿五日二円の株金払込をなすべければ之を返して銀行に充当すべしと申したるも、之れを一蹴せり。次で伊那電社員小瀬某来行し、銀行の預金を八掛にて売り

相殺したしと申込ありたるも、生垣常務との交渉に移す事とせり。尚有賀啓太郎来りて地所分筆の談ありたり。検査終りて代田を訪問し父の床揚としてビスケット一箱を贈り、千章と山本父の七七の祝に付て京都見物に付きて協議せり。伊那支店へ電話にて依託の問題は強硬に当るべし、又荷物は立会検査の上他へ移し保管すべしと命ず。小池来行したりと聞きて飯田へ帰る。赤穂検査は一時間計りなせるのみ。薫梧堂に一泊して小池、頭取等と話す。依託の問題に付ては強硬にツツパル事とす。

【語句の説明】①生垣常務：伊那電気鉄道会社常務取締役の生垣賢造。元技師。

②薫梧堂：明治期から存在した飯田扇町の旅人宿。地域の名勝。

#### 四月十五日 金曜

雨。生糸市価愈々暴落し養蚕の前途憂慮せられ伊那の天地荒寥に帰せんとするを思ふ。薫梧堂に一泊して朝金田を呼びよせ、小池と三人にて伊那委託に對策及伊那電の相殺問題に付て協議す。伊那委託に對しては強硬に倉荷証券に付て主張し一步も譲らざる事、伊那電に關しては相殺申込に對しては伊那電が預金を売るのが如き事は従来の密接なる關係を以て見るも差ひかへられたき旨申込む事として、九時二十分小池氏と共に飯田発赤穂に向ふ。伊那電支社にて生垣に面会し、預金を売る事を見合せられたし、預金に對し伊那電株を渡す事は以前の約なれば之を採用せられたしと申込たるに、前者に對しては考慮すべし、後者に對しては新重役としては困難ならんとの事なりしも最近上京すべければ考慮すべしと答へたり。

赤穂支店に出張して検査す。伊那委託の明尾来訪して米山と共に昨

日の主張を以てし（払込を宛てるから銀行の方は我慢してくれ）ても聞く要なしとはね付けたり。穀屋に泊る。伊那委託は其入庫生糸を皆他へ搬出したりと云ふ。

#### 四月十六日 土曜

晴。赤穂穀屋の裡三階の室に泊り、午前八時半より赤穂支店の検査を始む。大口に難問題のもの多し。中沢支店の分を検査して午後一時終了の上飯島支店へ転ず。竜口荘一新家庭を持つにはよき支店にて一生懸命よく精勵し居れり。午後六時迄検査して帰宅する事とし、七時飯田着。児島牛肉店に入りて夕食を喫し芸妓二名を待らしめたり。宴終つて三宅等と桜見物へ行き、桜の花の下に台を出して其上にて飲む。午後十一時自動車にて帰宅す。木下、吉川両行員も同伴なり。

当行株四円なりと電車中にて某云へり。

【語句の説明】赤穂穀屋…上伊那郡赤穂村（現・駒ヶ根市）で営業していた旅館、穀屋旅館のこと。赤穂村仲町に本店、同村駅前支店があった。

#### 四月十七日 日曜

快晴無風暖。日曜日にて快晴なり。久男昨日来り泊る。越後よりタケノ嫁に貰ひくれと懇望し来れる由に付、如何にせはよきやとの質問あり。之に対して嫁に貰ひてもよき意ありや、「有り」、然らば其心地にて予に一任すべし、越後の方へは森本へ一任しあれは其方へ話してくれと申送るべしと告げたり。久男其旨を了して去る。父母天気よければ八幡様参詣に自動車を呼ひて十一時出かけ、牧内伯母も同行して一週間計りの滞在して帰る。父母は先月廿八日竣工の水神橋（工費二

二万円余）のものを視察し、兼ねて牧内伯母を見送りて行く。午後一時に帰る。

中島を訪問して与一郎に組合の惣代のみを耕地集会所に集めて製糸部惣代を候補を定むる事等を議する為招集する回文を出す事を托す。道路堀の南普請中にて歩行よろしからず。中島と約して間瀬口入口の土地を丈測する事とせり。鹿太郎を訪問したるも喜代不在。河合垣借家人あり、貸せぬかとの話ありたるも態よく断る。座光寺櫛原勇一の父亡し、其見舞として金一円を贈り、旁々北原カケ野を訪問し兄より応挙の幽霊の幅を見せられたり。良きものなり。

#### 四月十八日 月曜

曇小雨。市場喜代が来訪した。父鹿太郎から頼まれた家族問題、則ち養女マスエを嫁にやるか智をとるかに付て、鹿太郎と懇談する事を懲慥した。按摩お政か来て父を摩（揉）んだ。組合支所へ出頭した。道路新設中に木下作太郎が居合せて、道路敷の切断切れ田地マセ口より出口上図（左図参照）の通り半端となりたるに付、予て与一郎口をき、分割する事に話まとまり居たる十九坪の測量を行ひたり。之に立会ふ。又午後一時より小学校に催されたる遭難児童慰霊祭に参加する。新任校長五味保徳に会す。慰霊祭は簡単に終る。終了後午後二時半上飯、銀行に出動す。原飯田病院院長去る十四日松川入にて銃猟に出張し惨死したる葬式あり。午後五時告別式に列す。銀行へ岡部氏来訪す。尚小口氏も来る。種々の問題フク（幅）轉し忙はしけれども思ふ事の半分も仕事は出来ず。帰宅して耕地の組合惣代を集めて製糸部委員の銓考（衡）、農山漁村低資の高利債借替に付き各組員に借替すべき様つとめる事を話す。

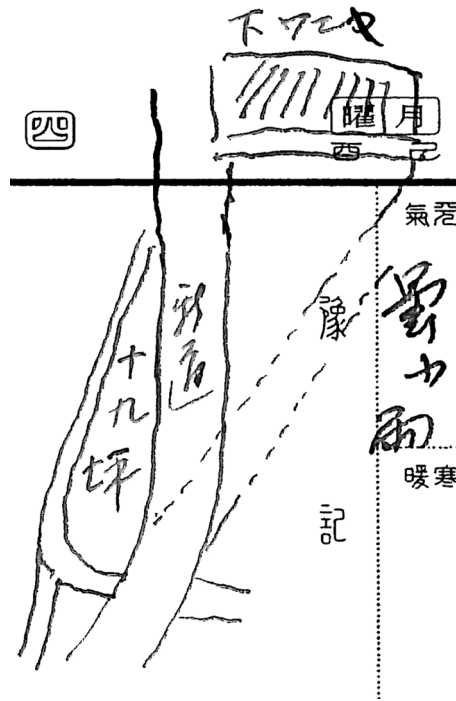


社会の今日 ジュネーブ会議日支問題を論ず。

【語句の説明】①五味保徳：三月三十一日に松尾小学校の訓導兼校長に就任していた。一九三六年三月退任。

②原飯田病院院長：原耕太郎（一八七二—一九三二年）。下伊那郡伍和村出身。一九〇〇年東京帝国大学国家医学科卒業後、〇三年に帰郷し飯田病院を創立した。下伊那医師会長・長野県医師会議員などを歴任。一九一二年、医療費受け取りの印紙貼付は不要とする印紙税法裁判に勝訴し、日本医業界に功績を残した。

〔地図〕



四月十九日 火曜

晴。朝今村与一郎、丸山泰治の両耕地委員来訪す。用件は弁天松森を横断すべき道路を模様替をして貫通すべしとの勧告なり。之に対し父と予と其交渉を聞きしに、返事は現在設計せる通り旧道に沿ふて幅

員を拡張せらるべし、其他に就ては考慮の余地なしと告ぐ。之れ弁天橋脚の現在より約二米八歩高まりたるに因る。若し現在のま、とせば吉郎平の居宅と道路との間急勾配となりて出入に不便生すべしとなり。然れとも現状のま、拡張を主張し、若し竹村要人來るとも之れには譲歩せざるべきを告げたり。兩人辞して帰る。上飯、銀行出勤す。併し午前中にて、午後は組合に惣代会ありて組合本所行。惣代会は主に蕪佃時価算定なり。次に製糸部委員の推薦を行ふ。又明年度の奨励品種に付て質問あり。支17×欧105及14×17を春とし110×105を夏とし平和安泰を秋蚕とする事に大体意見纏まり居る旨を告げたり。終了後理事会を開く。市瀬より低利資金貸替の件につきて前年度利子未整理分に対しても低資の貸替を行ふ様改正した、せぬの議論出てスツタモングの末、市瀬が議長かアイマイにして置くから悪いと云ひ出したか、之れをとり上げず置けり。

社会の今日 松本上海出征軍帰る。

【語句の説明】松本上海出征軍帰る：上海に派遣されていた第十四師団（宇都宮）は、四月一日に古年次兵の召集を解除された。これにより、松本の歩兵第五十連隊の一部も召集解除となり、同一八日に凱旋した。凱旋時の松本駅前から兵営入口までの長い沿道は、出征日に劣らぬほど出迎えに駆けつけた人々で埋め尽くされた。

四月二十日 水曜

晴。朝直に上飯、銀行へ出勤す。行員余暇多くして冗員淘汰の必要あるも計画のみして実行に至らず。行員も亦不安の状況にあり。併し人の和は天の利に優るものあるを以て徒に淘汰を行ふべきに非ず。慎重にすべきものなり。予は計画を立て、之を頭取に示す。

四月二十一日 木曜

晴曇。朝岡田医師を訪いて門歯の入歯と支柱と緩み動くを以て抜歯し、其補充の途を講じて上飯せり。抜歯せる時顔色蒼白となる。氣の弱きには自ら驚くに堪へたり。午前十一時上飯す。放課後石井病院に木下清彦の病氣を訪問す。木下辰雄は以前堯角の入院の時も父の病氣に付ても誰も来らず。吾より病氣見舞を云ふべきに非すとの説を採用して今迄見舞はなかつた。清彦は卒業式に上京の途次辰野にて発病し、石井に引歸りて入院し、一時は危篤を伝へられたるも稍快方に向ひつゝ、あるものゝ如し。

社会の今日 シュネウ会議調査員一行満洲入ると云ふ。

【語句の説明】①石井病院…上飯田町東野にあつた石井外科病院か。

開業医は石井虎秋（一八七八〜一九六六年）。石井は東京帝国大学医学部卒業後、甲府病院外科部長を経て、一九一〇年に飯田病院外科部長として来飯。一九一四年に開業し、戦後まで医業を続けた。

②シュネウ会議調査員一行満洲入る…一九三一年九月一八日の柳条湖事件勃発後、中国側の要請により派遣が決定された現地調査委員会、所謂リットン調査団は、三二年二月二九日に横浜に到着し日本での調査を終えた後、上海、南京、北平（北京）、大連を経て、四月二日に奉天に到着して満洲に入り、同二三日から満洲における現地調査を開始した。

四月二十二日 金曜

晴。朝組合支所へ行つた。別に用事もなかつたが農山漁村低利資金の借替の件が追々増加して予定の額に達する様な前景にあるとの事と、浜出し、生糸がデニール変差が多いので格が下がると云ふ事を聞

いた。それから岡田歯科医院へ出て前歯の入歯を取りはずして形をとり当座の用を弁する事とした。午前十時出行した。頭取は宮田へ葬式に出張して午前十一時退出した。新井育造の息（吉本屋の次男）か死亡したので会葬したのであつた。風越館に行員の慰安会を催すべく注文した。江戸町長屋の山口、鮎沢、近藤の三人が屋賃の値下を要求して来た。予は兎に角六月迄やつて見てそこで何とか考へると返事して置いた。後から近藤福平に父の所有の不動産登記の件につきて話した。午後六時帰宅した。弁天、河作（屋号）前の檜を松森へ転植した（政五郎を一日頼んで）。南の道路工事がダン／＼進捗して弁天橋台が約三米高くなるので松森の中を道路を作る様竹村と助役と来たが父は断つた。

予記 父か椀屋から弁天木植の処迄行く。夜点灸した。

発信 信也実印出来上れば送付せよ。

受信 席史郎、喜寿祝。大兄。

四月二十三日 土曜

曇雨。朝九時に警察へ来られたしとの昨夜駐在巡查よりの報に出頭す。来る廿九日愛国運動を催すに付き消防組、小学校、町長等を召致して相談をしたのであつた。愛国運動は去る二月十一日紀元節に催す予定であつたが、国会議員選挙の為に中止して居た処である。町長は心中決行は不賛成らしかつた。両角飯小校長もイヤ／＼賛成の様子であつたが大勢が決行と定まつたので決行する事とし、十数名集まつて消防、軍人、作興会等か主となつて決行する事とした。午後三時から中等学校、付近小学校長を集め、青年会員等も集めて相談して遂に決行する事に定まつた。種々の細目に付ても協議した。正午銀行に出勤

した。放課後も復た出頭した。放課後行員の為に慰労会を催して観桜会に替へた。風越館に催した。頭取も初めから酔ふて踏りて居た。福住へ行つて洋服代を支払ふた。帰つて夜になつて関田齒科の処に前上顎の仮入歯を新調してもらつて帰つた。増恵は和氣子を連れて山本へ行つた。タケノと久男との結婚問題が起つて越後の要造の許へ手紙で申送つた。

先に要造からタケノを久男に嫁にやらんかと申送つた返事に之を断り、越後の国元で嫁にやるからよとの事であつたので、重ねてタケノか再来したかどうかと申送つた。

発信 静野要造、タケノの件。

受信 丘山。信作。岩崎忠郎。千章。小石。

社会の今日 国際連盟滿蒙調査隊滿洲入る。

【語句の説明】①廿九日愛国運動を催す：天長節に合わせて挙行された下伊那郡下愛国運動は、小中学校・在郷軍人会など各種団体が上飯田町内を行進し、北原阿智之助の宣言朗読のち散会した。

②両角飯小校長：飯田小学校長・下伊那教育会長の両角喜重（在任一九三一年五月～三八年四月）。

四月二十四日 日曜

曇雨。終日家居す。書面の往復、新聞の未読のもの、雑誌図書未読のもの山積して其始末をつくへく家居す。終日春の日を家居したるも其の能率は微々たるものなり、思ふ事の半にも達せず。山本父喜の祝を行ふべく千章、席史郎より話ありたるも其の計画の内容を知らず。父按摩にかゝり予はマツをして灸を点せしむ。昨日は右の股神経痛らしく痛みたるも今日は痛まず。静野要造よりハカキにてタケノの親と

なつて竹村久男と添ふ事の出来る様尽力してくれとの申込ある。之に對して其れは承知したが戸籍上の事と仕度の金は如何すると申送る。丸岡屋来訪して松島藤太の家屋を抵当にとりて貸金あり、之を登記して貰ふに付承認書を願ひ度しとの申込あり。丸岡屋と予との間の事は後日約する事として承諾し置けり。道路問題等話して去る。タケノを呼びよせて増恵と二人にて、越後国元へ手紙にて今回竹村久男との縁談は整ひたれとも仕度金の事は如何にするかを問ふ。黙して答へず。国元へ請求するより外なし。

予記 尚夫中学にて風越山登。増恵午後七時帰宅。今村与一郎を召きて土管を埋める事を話し、又父より前回の石垣の事をとり直す様話す。発信 席史郎、喜寿旅行に就て。岸本興、活動写真に付て青年軍人へ話せ。信作、喜寿旅行計画に付て。

受信 静野要造、タケノの結婚に付て金はドウスル。

社会の今日 軍人勅語下賜五十週年記念式あり。

【語句の説明】軍人勅語下賜五十週年記念式：軍人勅語は一八八二年一月四日に明治天皇が陸海軍の軍人に下賜した勅諭。その下賜五十年にあたる一九三二年四月二四日に五十周年記念式が東京で開催された。

四月二十五日 月曜

雨晴。組合支所にて青山、江塚等と製糸部終業式に付て相談す。廿七日繰糸終るを以て廿九日又は三十日に於て閉業式を行ひ、旧製糸部委員を招きて慰労会を催す事に決したり、猶帝國蚕糸組合總會出席せんとすと予の同組合總會出席に關して心算を告ぐ。生糸補償法の補償糸の処分方法をつけんとし、横浜に於て其の政治的解決なる旨新聞に

現る。

午後上飯、銀行出勤す。北原阿智之助に電話を以て来る廿九日の愛国行列の際朗読すべき宣言文併に朗読迄同氏か引受けくれる様依頼せり。尚警察へ電話を以て右の旨小松部長に話したり。銀行にては放課後課長会議を開きて事務の繁閑に依りて仕事をなすべき旨を告げ、金田支配人結末を臆首〔と〕せられぬ様努力すべき旨を告げて閉づ。関島芳馨に餞別一円贈りたり。上柳敏雄に電話にて伊那銀行株売却すへき旨告ぐ。又前沢俊三氏に江戸町借屋家賃日掛の形式にて取立てる旨を告げたり。

【語句の説明】①帝國蚕糸組合：蚕糸業者を組合員として平時の備荒財蓄によつて非常時の自力救済に充てるために、一九一九年三月に成立した積立金造成組合。一九三二年の滞貨生糸問題で生じた損失額について、政府・製糸業者・銀行の三者が負担する際に、製糸業者の分担分は、同組合の出資積立から無利子一箇年賦償還の方法により解決することとなった。

②生糸補償法：一九二九年三月公布、同年九月施行の「糸価安定融資補償法」を指す。同法案によると、生糸価格下落時に生糸価格の安定を図るため、銀行から生糸の製造者または加工者に対し、一定の条件によつて生糸を担保とする手形割引を行うことで、資金を融通させることとした。

③関島芳馨：一九一四年、下伊那郡竜丘村出生。東京外国語学校支那語部法律科、満州国大同学院を卒業し、一九三九年、満州国国務院総務庁高等官試補。戦後は、竜丘村助役・兼任教育長、愛知県公立学校教員などを務めた。

四月二十六日 火曜

晴。重役会が午後からあるので出行した。正午信用組合に前沢氏を訪問して江戸町貸家賃を日掛で貯金函〔箱〕に投入せしむる事とし、月末集金する事を了解せしめたり。重役会は吉川、井村、太田の三氏來行したり。吉川は其持論たる「預金を手を廻して安く買ひて此際利益を得べし〔と〕と主張し、之に対して予は銀行の信用、預金者の請求の緩なる事、強制和議を覚悟する事、私財提供の事迄も話して其の説を迎したり。行員淘汰の件につきては休職給を給する事とし淘汰の前に当り之を実施する事とせり。電話にて警察へ話し今日北原阿智之助へ宣言文起草朗読迄頼みたり。今回の愛国運動につきては其根本を作りたり。厩史郎へ電話にて打合せ、廿八日夜行東京より京都へ行く旨を告げたり。上柳敏雄を召致して関島余四郎が千代田商會社長となりたる事、之に依頼する事等を告げたり。理髪して帰宅。

済生会へ出席すべく用意せり。下女タケノを竹村久男と結婚せしむべく金錢の事迄相談してやる。

予記 タケノは先般国許より信州へは結婚せしめぬと云ふてよこし、歸りて金を皆兄にとられて久男を恋し歸りたるなり。

四月二十七日 水曜

〔記述なし〕

四月二十八日 木曜

曇。午前六時新宿へ着すれば、塩沢邦一、敏雄の迎に來り居り。彼等は麹町にて下車し、予は駿台荘に入る。信也を呼びよせモーニングコート借りて済生会乳児院開院式に參列せんとして、万世橋高木衣裝

屋に入りて借り着し、直に信也と分れて其赤羽根橋乳児院に至れば善美をつくしたる建物あり。新井育造氏来居りて面会す。特別有功賞は閑院宮殿下の名代として梨本宮殿下より親ら御授あり、之を各自拝受して退き、式場に於て閑院式参列し賜餐の応に浴す。西洋料理数品あり、菓子折一個は膳立せり。午後二時之を頂戴して借着返却して〔以下記述なし〕

【語句の説明】①濟生会乳児院：関東大震災の直後、恩賜財団濟生会は乳幼児救養のために東京芝区赤羽橋畔に乳児院を設立した。震災後の資材不足により、施設はバラック式の建物だったが、一九三一年に鉄筋コンクリート三階建へと改築され、三二年四月二八日、開院式が開かれた。同日、長野などの一府六県在住の緑葉特別会員一三〇〇名に対して、会員章御親授式を挙行した。

②閑院宮殿下：閑院宮載仁親王（一八六五～一九四五年）。騎兵連隊長、同旅団長、第一師団長、近衛師団長などを歴任。一九一二年陸軍大将・軍事参議官、一九九年元帥。一九三一年より参謀総長に就任。一九二三年四月より恩賜財団濟生会の総裁を務めていた。

③梨本宮殿下：梨本宮守正王（一八七四～一九五二年）。陸士七期卒。歩兵連隊長、同旅団長、第一六師団長などを歴任。当時は陸軍大将・軍事参議官。

四月二十九日 金曜

晴。朝六時東京都着。夜来三等汽車中一睡も出来ずして脳裡ホンヤリせり。山科の信作方を訪問すれば、同しく今朝山本父の一行席史郎と千章と来り居り合流す。信作の家は西洋式の清瀟なる家屋にて文化住宅の如く、周囲の様子も垣を隔て桜の木を廻して隣家に続き竹藪も附

近にあり、田園としては便利もよく文化の田園都市なり。此の如き地に生活する信作は幸福なり。卓を囲みて父子五人歓談す。九時自動車雇いて見物に出づ。雨上りの道自動車を馳すれば爽快なり。先つ東山を見物せんとして知恩院前に下車して、知恩院山門にて記念撮影をなし庭園を見て東山清水寺等を徘徊し、鴨川菊水に入りて昼食す。一人分三円をとられたり。皆疲労したれば大丸を見物して宿をとる。千切屋に泊す。夜京都劇場に西洋劇キネマを見て、其の新式西洋文明の肉親なるものに寧ろ不快を感じて帰る。京都のハカキを知己へ出す。

予記 天気よく飯田の愛国行列の盛ならん事を祈りて居れり。社会の今日 飯田にて愛国運動を決行すべく用意したり。

【語句の説明】鴨川菊水：一九一六年創業の洋食店、菊水館か。二六年は西洋館に改装し、レストラン菊水として現在も営業している。

四月三十日 土曜

雨。千切屋で朝七時に起床した。雨が降つて居るので奈良見物の予定も裏切られて博物館見物に予定を変更した。先つ北岡猪三郎を訪問して竹堂鹿の絵代及扇面お福代とを小切手割引にて八百九十余円を受取り、再び博物館へ入る。博物館では午前十時より同日午後三時迄見物す。併して昼食をニカクと云ふ祇園の鴨川へ面したる料亭にてとり、五条坂へ行きて春山と云ふ窯師を訪ね、木公形の素焼の鉢に各々書画をかき紀念品として焼かしめたり。注文して帰る。骨董屋を素見して各自安物を買ひ求めて帰る。後自由行動をとる事として太平楽なるカフェーへ立寄り席史郎、千章と共に、千章は先に出て、予と席史郎とは偶然訪ねたる梅松の前に出てたれば、松三を訪ねて面会して話し

一時過自動車にて山科に独り帰り泊る。

【語句の説明】ニカク：「祇園みかく」か。一九二九年創業の鴨川に面する料亭。

五月一日 日曜

雨後晴。信作宅の一夜は夢みる暇もなく明けた。昨夜の祇園情緒の爲一行皆眠気が去らなかつた。午前九時に起きて朝湯を焚いてくれて入つて、又一酌くみ今日の旅程を決するのであつた。信作の案内で醍醐の三宝院に豊臣秀吉の豪奢を極めた由緒ある庭内を見物して、宇治・桃山見物の案を立て、徒歩て出かけた。山科及醍醐辺の一物一草と雖も皆歴史的のものならざるなく、三宝院の庭園は池、滝の興趣は尽きなかつた。唯惜むらくは三宝院の僧侶の古刹を守るのみて実教には無関心である事である。僧侶の事を見れば癩の種のみ多し。宇治へ出た。宇治川の水増水して居たか、渡船へ〔て〕対岸へ渡つた。千草は危険を恐れて渡船はしなかつた。

五月二日 月曜

晴。午前一時十分山科発て帰宅の予定であつたが、昨夜の宴に眠過して午前四時半起床、席史郎と共に信作に駅送見送られて出発した。東山には春の暁の蛾眉の様な月がか、つて居た。席史郎と同車で楽しむ旅行も之れて終つて、一步一步再び日常の仕事、併も余り気乗のせない仕事に近くかと思ふと山科の兄弟団欒のまともが嬉しかつた。名古屋で午前十時下車、三十分間の時間を利用して本町小広路〔広小路〕通の植木屋を見物した。牡丹や睡蓮等があつた。惜しかつたが買ふ事は出来なかつた。三留野から自動車で大平峠を越した。新緑の麓

の景色、ツ、ヂの花等、春の旅行の面白さを迎へて居る様に思はれた。善光寺行の岐阜の婆連の団体が汽車中へ乗つて賑であつた。飯田へ着いて原文武の所で休んで席史郎と勘定した。東京済生会から京都巡行の旅行五日間で百二十五円の金は消へた。午後四時半着飯して大平頭取に会ふた。

直に帰宅した。京都美術倶楽部へ出品して売却した竹堂180の鹿の絵と宮沢のお福83円の現金を父に渡した。一応済生会及京都の旅行の話をした。父には菓子130銭を土産に出した。

予記 五日間の不在中、伊沢太郎が死し、\*\*\*\*\*問題が上り其他永く不在した様に思はれた。

【語句の説明】①まとも：内居。円く輪になつて座ること。車座。

②伊沢太郎：松尾村の収入役。一九一七年四月就任、在任中の三二年四月二八日死去。

五月三日 火曜

晴、暖。暖気加はり桑葉出て初む。併し未だ外皮を破りて出芽のみ。タケノ、久男との婚姻に付ては国元へ結婚費請求したるも一文も送金に來らず、手紙を以て、両親病氣、農繁期に入りたれば信州へ行く事も出来ず「タケノのよき様頼む」との通信ありたるのみなり。依て予は手紙を以て久男との婚約成立、来る五月五日を以て結婚する旨を報知しやりたり。信也に金百五十円送金せり、安田銀行呉服橋支店宛小切手。伊沢太郎死亡、昨日葬式あり、旅行中不在なりし為今日悔みに行く。小林宣も居合せたり。組合支所に立寄りて青山と電話にて旅行より帰りたる旨を話したり。午後上飯し銀行出勤す。役場に立寄り軍事功勞徽章を受けとる。

所得税調査は五日より再開する由なり。午後六時帰宅す。

百十七B樓上に上海事件其他滿洲事變の展覽會あり一ベツす。写真、宣伝札等多し。朝、信也より送り来れる済生會の下賜菓子到着して之を分配頂戴せり。「後略」。

発信 信也、送金。要造、タケノ結婚、五日執行報告。

【語句の説明】安田銀行呉服橋支店：安田銀行八重洲橋支店のことか。所在地は日本橋区呉服橋三丁目七番地三。一八九六年に明治商業銀行本店として營業開始。一九二二年の合併により安田銀行江戸橋支店となり、三〇年八重洲橋支店へ改称。

#### 五月四日 水曜

晴。昨日来の暖気にて頓に桑の芽延ひ初む。猪佐雄來訪し所得税調査に付き減税方依頼あり、彼が投票の際予に好意を持せず沢柳に投票して、今更予に頼むべき筋合にあらずと思ひしが、何気なき様子にて引受くる事とせり。組合支所に行き青山専務と役員會に付打合を行ふ。正午頃銀行出勤せり。電話にて野原文四郎に税務署所得調査の要綱に付問合せたるに、五日午前十時より始まる旨話あり。

放課後銀行事務組織に付て打合を行ひたり。伊原五郎兵衛書を学ひ居る由を聞き、禅林句集一冊を贈りて、其一美句を書せんとするの料とせられん事を望み置けり。銀行の持込タンスをタケノをして買はしむ。三円にて買入れ、仕度を之れに入れて嫁に行かんとす。立派なる仕度出来たり。然し国元の下女タケノに対する態度は冷淡にて、当方より電報にて嫁に行く事に決した事、金を送つてよこせと申送つたか何の返事なし。

信也に安田呉服橋支店宛發送す。

社會の今日 上海停戰條約大体成立の模様。

#### 五月五日 木曜

曇。組合に理事会あり、午前七時より組合支所行。途中中島居りて用があると云ふ、下腕屋東側の道路を取広めて旧道の接続線とせんと申出づ。見れば既に工事にとりかゝり居りたれば、予の承認も経ずして之を工事に着手せんとする事は宜敷からず。マセ口（馬畝口、屋号）入口の土地は坪五円（十九坪）の事、其れが決定せされは着工すべからずと申込みたり。下腕屋東の道は九尺として潰地四坪あり、之を如何にすべきかに付きて交渉せり。かれ是して時間を費し、七時半過組合着。組合へ吉沢工來訪して、百十七銀行対吉沢の關係に付訴ふる処あり。即ち三千円にて田間との百十七關係を解決したる事、入担は成るべく少くする事、支払利息はマケテもらふ事、年限は永くする事等なりし。之れはダメなりと拒む。田間の方との一交渉必要なり。竹村順一來りて凍豆腐の工場買取の件を話す。午前中組合に居りて、正午税務署調査會に出頭す。野原、島岡、市瀬と予の三人なり。何事もせずして退く。銀行へ出頭して、午後四時タケノを連れて山本行。途次田中一郎と一所になりて行く。田中一郎、イチと共に山本行、イチ妊娠せりと云ふ。

タケノの嫁人に竹村久男の所へつれ行く。結婚式あり、招かれてもありタケノの親分として列席す。山本にては田中と共に御饗応をうく。荷物を早朝、喜代を頼みて下男と共に持ち行く。

【語句の説明】竹村順一：松尾村農會副會長（一九一七～三三年）、同會長（一九二三～三一年）、学務委員（一九二二～三三年）、村會議員（一九二二～二五年、三三三年～四二年）などを歴任。森本は、竹

村が松尾村凍豆腐組合長として模範工場設置を主導するなど、私財を擲つて村への凍豆腐製造業定着に貢献したことに同情を示し、模範工場売却の世話を引き受けていた。

#### 五月六日 金曜

雨晴。山本の一夜、酔は醒めて朝六時に起床して朝食をとらんとせしに、清水より電話にて、吉川八時にて自動車出発すれば、予にも是非出発せらるゝ様申込あり。吉川と二人にて倉田橋三郎を訪問し、駒場支店の沢柳及ブローカー大脇と共に橋三郎の案内にて彼の入担土地、山林を見る。山林は全部立木を売り裸山なり。県道の東西に亘り汗を絞りつゝ、検分せり。途中蕨の生し居り、手折りつゝ、新緑の山野を跋涉すれば心地よし。支店に帰りて休憩後、再び自動車にてオニ出し山を検分せり。川を隔て、見るに藤にまかれて植林地立林延びず。三五〇〇円にて買手もありしが、其境界線を見んとして果さず、四〇〇〇円を以てせは売る事としたり。大脇と倉田の土地全部売却せは4%、一部分ならば2.5%の手数料を与ふる事に話をなさしむ。疲労したればツ、ジを折りて帰り、吉川、沢柳に大脇と夕食をとる事を一任して帰る。此日調査委員会ありたるも欠勤せり。夜、仙安に於て太田課長の歓迎会ありと聞く。

受信 竹村老人、京都より。

#### 五月七日 土曜

晴風寒し。桑の芽出て畑面青み亘る。中島を訪問し与一郎に面会して下椀屋東の道路を抜け九尺にする事に付ては、去る五日朝、君より話ありて工事にかゝり居り坪数を見てくれとの事なりければ、立会の

上、四坪と大体目分量にて決したるが、予は既に予の父の承諾を経たるものと思へり。然るに本朝父に其話をしたるに未承諾なる由に付、之に付ては父の承諾せしめ置く要ありと申進め、猪佐雄の手先となりて彼等が惣代をつとめる事に付皮言をならへて去る。上飯、銀行へ出頭し一時間の後税務署に去る。税務署会議に於て昨年は養蚕所得を計上せずして本年は養蚕所得を計上したる事の不合理を責め署長と論争したるも結局「仕方なし」と云ふ処にて折れ合ひ原案を認定する事とせり。

島岡と閉会后内容を調査の上帰る。中島と泰治と兩人税務署へ訪来り、下椀屋東の道路敷地承諾を父に云ひしに叱かれし、如何にせはよきやと相談に來りたるにより、予より父に話し置くべしと告げ、明朝來訪する事として分れたり。組合支所に行き水引組合発会式に臨み、酔いて龍門寺に行き帰宅。

予記 副業奨励にて水引組合を作り、現在の組合が横暴なるより之を脱出して來り予に相談ありたれば、副業奨励として引立てる事にした。仍て十二、三名にて組合を作り発会を支所にて行ひ予と専務と江塚と竹村、代田を招く。

【語句の説明】水引：贈答品の包装に用いる飾り紐で、下伊那地方の特産品。近世期には手漉紙、明治一〇年代以降は綿糸、明治四〇年代以降は機械抄紙を主原料とした。松尾村では一九二二年頃から、従来農閑期副業の主力だった養蚕業の不況への対応策として、水引生産が急速に拡大し、この時期には下伊那郡内で鼎村に次ぐ主産地となっていた。

#### 五月八日 日曜



雨。午前中家居せり。刀劍の手入をなし油を付けたり。中島、泰治の兩人父を訪問して下椀屋東端の道路開通方懇請せしに父に叱られ引下る。父は耕地委員が先に下椀屋の南を経て集会所へ参る道を作るからと云ふので旧道を廢道とする事を承知せしも下椀屋の東へ道を開ける事は承知せず、惣代は予をダマシたり、と大に叱られたり、如何にせはよきやと予に相談ありしも、予は感情は時間の解決を待つに非れは緩和せられず、予が一応父に話して後、君に話すからと云ふて返す。久男礼に来る。既に下椀屋の東の道は成功し居るを見る。亦予はマセ口の入口の道は潰地代金を決定せされば之に手をふるべからずと云ひ置けるに、代金は五円を主張し中島も之を承認せり。組合支所へ行く、午後三時なり。塩沢春次郎養父金作死亡し一昨日葬儀あり、一円香料として贈り悔みに行く。組合本所行、青山と低資に付役員の預金証に付話す。又上久堅を当方へ入荷せしむる件につきても十日の製糸部委員會に付話す。塩沢手付金を新機械を何時でも渡す手金として形を發する事と話す。

予記 龍門寺一八會あり、夜之に無門會の陽松軒の達磨を表装し持参す。市村、塩沢等來會す。犬塚を訪問して信作に贈る刀を求めんとして一文字明家を廿一円にて買ひて帰る。枕頭に眺見てあかず。眠られず、うれし。

社会の今日 仏大統領ゾーメ氏露国人に暗殺せらる。

【語句の説明】 仏大統領ゾーメ氏露国人に暗殺せらる。ポール・ドゥメール仏大統領は、五月七日ロシア人移民ポール・ゴイグロフに狙撃され、翌八日に死亡した。ゴイグロフは、フランス政府がソヴィエト・ロシア政府に干渉せず、ポリシエヴィキ排撃に尽くさなかつたことを不満として犯行に及んだと自供した。

五月九日 月曜

晴。直に上飯せんとしたが父と道路に関する感情の激忿等を緩和すべく話した。併し父は予の調停には応ずる気配なく、道路委員の仕打の不愉快なるに御機嫌斜でなかつた。遂に中島を訪問して父の感情は解けないと話した。それは今後は君等の態度を如何様にもすべしと云ひ捨て、上飯す。途中松島藤太郎を訪い、幸、裏に居たれば本年整理したる土地に水を曳きて水田とすべしと申したる処、水はかけれんと答ふ。そんな不熱心ではだめだと争になり、然らば土地は不要なりやと詰めたれば、藤太憤然色をなし鬼の様だと云ひ、鬼とは何事だと責め、ツカミカ、ラン気配なりし故、女房之をなだめて、予は喧嘩するも面白からずと思ひて上飯し去る。税務署にて調査し午後三時に終りて帰る。帰りて銀行へ立寄り、行員の問題其他に付研究して帰宅。

野原友三と野原の養父母、妻との間不和となり離縁問題起る。

予記 下椀屋東の旧道連絡線に付て父が惣代二名を叱りたり。

五月十日 火曜

晴。朝早く税務署へ行く。第一番なり、時に八時十五分なり。猶興社前にて吉野に會いて暫く話す。下中弥三郎の率先せる日本国民社会党と(南信勤労党も之に属す) 社民党脱退組赤松一派と合流する予定であると云ふ事も聞いた。僅に三三分間て税務署へ去つた。午前中、村部議員の來着がないので飯田の部の調査を見た。大平も税務署へ来て、千代田商會の營業の利益のないものへ250円を利益と見た不当に付て課税の不公平を陳述した。予も之れには反対せざるべからざる立場であつた。大平と共に千代田商會の損失は之を陳へた。午後銀行へ一寸立寄りて組合支所へ歸つた。組合ては製糸部委員會を開いて、各部署

を定め奨励蚕品種を定め、事務上の打合を行ふた。午後七時に帰宅した。道路は大体に於て出来上りマセ口の入口の処が出来上らんとして居た。此工事は同じく疑の眼を以て見る処であつた。何となく気が軽く躁て居る様で下肚に力がなかつた。生糸価は惨落した。財界は愈々不況に陥らざるを得ず、前途愈々暗澹である。

予記 信作の処へ贈る刀を荷造した。養蚕發生には充分なる桑となつた。天竜峽姑射橋竣工式は行はれた。社会の今日 上海停戦調印成る。

【語句の説明】①日本国民社会党と(南信勤労党も之に属す)社民党 脱退組赤松一派と合流する予定：下中弥三郎率いる日本国民社会党と社会民衆党を脱した赤松克麿らのグループは、労農大衆党を脱退していた今村等一派も含めた国家社会主義政党的の合同を目指しているが、結党式当日に決裂した。

②天竜峽姑射橋：もと太田橋。初代は一八七七年に竣工し、一九〇五年に二代目が竣工した。日記中の記述は三二年に竣工した三代目のもの。現在の姑射橋は七一年に竣工した四代目。

五月十一日 水曜

雨。組合支所を経て銀行へ出勤、直に税務署へ出頭す。

午後五時迄調査に従事して午後五時より仙寿楼に於て開かれたる松川入山林組合上飯田羽場区と飯田町愛宕坂下大王寺との間に明治十四年より起れる持分問題の解決せるに付、其祝賀会に招かれて出席す。調停者竹村要人、関島喜代、牧野貫二、江塚佐三郎、田中勇太郎等あり。竹村要人主に之に尽力せりと云ふ。両町長酒肴を斡旋せり。宴終りて市瀬泰一と兩人にて仙安に入り木下信、篠田宗一と来り合して二

次宴を開き、十一時迄飲みて帰宅す。酔つ払ひたり。信濃時事新聞の九日のものに予が鮮人より脅迫をうけたりと掲載ありし故、之れが取消を電話にて申込む。

【語句の説明】①関島喜代：一八六六～一九四二年。松尾村に隣接する鼎村の学務委員、村会議員、村長(一九〇四～一三年、二二年～二六年)を歴任した。一九一七年下伊那郡会議員。②田中勇太郎：村会議員(一九二九～三三年)。ほか、松尾村明耕地の耕地委員(一九二八～二九年)、学務委員(一九二九～三二年)、土木委員(一九三〇～三二年)を歴任。

③両町長：飯田町長は小西吉太郎(在任一九一八年一月～三七年三月)、上飯田町長は松澤源治(在任一九二九年二月～三二年五月)。

④市瀬泰一：一八七六～一九五〇年。本名は俊太郎で泰一を襲名。一九三三年四月より飯田町会議員を務め、初代飯田市議会議長(一九三七年五月～三九年一〇月)、第二代飯田市長(一九三九年一月～四一年三月)などを務めた。

⑤木下信：飯田町会議員(一九三三～三七年)。

五月十二日 木曜

曇雨。朝猪佐雄、太源治、庄太郎、菊太郎の四人来訪して今村一作に菊太郎の家及宅地空け渡すに付き、今後今村太源治に菊太郎の貸地を転貸せられたき旨申込来る。依て借地証は後日作製の上調印をなすべしと申渡せり。尚菊太郎の小作せし前畑も同時に付属として貸せられたしとの申込に對し応諾す。

上飯、銀行へ出勤して後、税務署へ出頭す。午後四時松下修一郎を銀行へ召致して、原守国事件仲裁の状況に付て報告を聞く。林館に鳥

岡を沢柳と共に訪問して夕食を喫しつゝ、養蚕所得30銭掛とする事及桑園所得の減額方を申込む事に決したり。両日共組合へは出頭せず。信件に刀剣を寄贈せり、新刀として正治の銘あり。長三尺もありし。受信 信件。

【語句の説明】 松下修一郎：飯田市通り町二丁目吉本屋醬油店主。

五月十三日 金曜

晴。養蚕石原の種四枚掃立す。道路開通の爲五枚注文の処四枚とせり。一般の掃立は十三日より十五日に亘るもの、如し。直に上飯し銀行にて行務打合せの上、税務署所得調査に出頭す。本日左の通り鳥岡、沢柳と申合の上署長に申込む。(一) 桑園所得を前年通り零とする事、(二) 養蚕所得は原案を見るに収繭一貫目に付金七拾銭と見積れるもの多し。故に此際全部を有産とし金三拾銭を標準率とする事。此件につき町部委員の同意を得て署長に申込み、押問答の末各人に付斟酌する事として決する事に打合せたり。(一) に付ては署長同意を表せず。三原屋を訪問し文雄に面会して所得調査の傍三原屋醬油合資会社の書類は未提出なり。営業所得の調査関係もあれは定款を見たしと申込みたるに、文雄定款を持ち来り。見るに未だ年度末決算書提出なく社員総会も開かれざるが如し。故に至急帳簿により貸借対照表損益計算書を作り社員の同意を経置くべき様注意を与ふ。裡の土蔵を見て去る予記 代書人近藤福平を招致して父の土地の保存登記及信也に名義売買の登記をなすべく土地未登記もの調査方依頼し土地台帳を持ち去る。発信 信也、印鑑届出済の通知す。

【語句の説明】 掃立：孵化したばかりの蚕を柔らかい鳥の羽等を使って蚕紙から移し替えること。

五月十四日 土曜

晴。午前中組合支所行き事務を見る。上飯、銀行にて頭取と事務打合。頭取預金買入に付き心配し其の利益を如何に処分すべきかに付て研究し、猶予の献策の行員淘汰に付ては承諾せず。決定に難色あり。

午後税務署へ調査の爲出張す。所得税調査は予の組は(一) 桑園所得を前年通り無所得とする事、(二) 養蚕所得を全体に於て有産と見做し一貫目に付金三十銭を以て所得とするの二を提出して論争せしが、結局(二)は百貫迄を七十銭、百貫—三百貫五十銭、三百貫以上を三十銭とするに妥協せり。猶希望条件として明年度は此不況継続せば養蚕所得は零とせられたき事、桑園所得も同しと云ふ条件を申出す。

午後六時迄押問答の後、(一)は署長の反対にて希望として解決。直に上飯田の藤を自動車にて全員見物し、三宜亭にて夕食を喫し貸座敷業者の陳情ありしにより実査の爲田口、沢柳を除き他の五名自動車にて出張す。

組合の塩沢藤雄退職、東京へ行くとして饒別一円贈る。  
社会の今日 国際連盟委員満洲視察を終る。

五月十五日 日曜

快晴。共同火災保険会社の岡崎氏来訪して予に保険会社の代理店を依頼し来訪し午前中同氏と話す。氏の国家管理説あり、予が代理店業を銀行にて計画し居るにより、代理店は暫く猶予せられたしと告げて其代理店を断る。午後休養して後釣に行く。川尻にて雑魚五十匁計り釣りて帰宅す。父は道路を親切に作らずと云ふて怒り居り、殊に下梶屋東の道を承諾なくして作りたりとて大に怒り居れり。座敷の庭のツ、ジ今を盛りと咲き居れば家内中にて茶を喫して見る。尚夫九十九

谷へ夜営に行きて帰る。今日は終日休養せり。

下椀屋の東の道路を話もなく作つた（吾所有地四坪を潰し）と云ふ事が皆猪佐雄の指金であると云ふので父は立腹した。一から十迄話もなく道路を作ると云ふのが不満であつた。之に付て父は村長へも話して此の無礼を詰ると云ふ勢であつた。

受信 原昇返礼。信也。

【語句の説明】 共同火災保険会社：一九〇六年に三井、住友両財閥により設立された保険会社。開業以降は運送保険、海上保険そして傷害保険など経営範囲を拡大した。

五月十六日 月曜

快晴。首相を銃殺し、内大臣官邸、警視庁へ爆弾を投し日本銀行等を襲撃したと云ふ有史以来の大椿事が東京で起つた。青年陸海軍人が下手人である事を聞いた。果して然りとせば軍人の国を誤るも甚しい。彼等は祖国滅亡を憤り有史〔司〕大官を襲ふたのであるが、果して憐むべき輩であり軍部の名譽の為に敵である。此話が税務署で調査員中に起つた時に野原は協力内閣として平沼か出ると云ふた。島岡は高橋か出ると云ふた。市瀬は西園寺か出ると云ふた。予は誰か軍部のものを政友会が党首として引込み内閣を組織すると予言した。

中島の与一に会ふて前田の土手を早く作る様申込んだ。それから上飯して税務署に出勤した。調査決定額を議して午後五時迄居た。それから市村の招宴に臨んだ。銀行は欠勤した。市村の招宴は田楽であり薄茶が出た。龍門寺和尚と平栗と予の三人の客であつた。夜十時帰宅。助宗の銘刀を見て心か快であつた。信聯へは青山を派して置いた。

予記 軍部の連中が首相を暗殺した事は彼等か祖国を守る心事は憐む

へきも国を誤れるは惜むへし。内閣総辞職する事になつた。犬養は政治家として惜くはないが文人として惜しい男であつた。此の風一度一般に伝はらば殺伐の風天下に満ちん。革命之より始まらん。

社会の今日 昨日午後五時陸海軍人が首相を殺し警視庁、内大臣官邸に爆弾を投した椿事が起つた。

【語句の説明】 ①平沼：平沼騏一郎（一八六七～一九五二年）。検事総長や司法大臣を歴任し、当時は枢密院副議長。五・一五事件後、政友会の森恪が次期首相として平沼の擁立に動くが、既成政党や元老西園寺公望から嫌われており、また平沼も政界に確固な基盤を持たなかつたため、実現しなかつた。

②西園寺：西園寺公望（一八四九～一九四〇年）。五・一五事件後、西園寺は元老として後継首班指名のため上京した。後継内閣に関する昭和天皇の希望や陸軍の政党内閣反対などの状況を考慮し、政界・軍部両首脳から意見聴取した上で、斎藤実を後継首相に奏請した。

五月十七日 火曜

晴。午前中父と道路に付て話す。父は元老に話かないと云ふので憤り居り今迄殆んど自分の掌中に在るか如く仕事をなし居りたれば、其の心地を以て現今の世相を見るもの、如し。時代を知らずして感情を以て率ずるは宜敷からずと忠告す。併して猪佐雄に対する憎の\*\*\*。予は寧ろ彼等を懐き込むの度量を以て事に当らん事を告げたり。又父は隠居を修繕して自ら隠居に入りて閑日月を送らんと申出ず。

今日は所得会の最終日なれとも小池氏来行したれば経済状況に付て種々話をなして後午後一時税務署行。始めより順次問題を解決して総

て別に異議もなく談笑の裡に調査を終る。伊原五郎兵衛氏の所得に就て天龍川水電の重役としての報酬に付異議を申出て議論して六三銀行の分は取消さしめ、天龍川の方は生かして置けり。全部完了して午後五時より仙寿楼に於て宴を張り税務所員六名招きて宴を張り午後九時帰る。

予記 陸軍士官学生及海軍の将校犬養首相を強訪し暗殺す。近来になき憂ふべき事なり。有史以来未曾有の事なり。

【語句の説明】天龍川水電：天龍川電力株式会社のことか。一九二六年に大同電力の傍系会社として設立された。

#### 五月十八日 水曜

快晴。養蚕一眠で休み中、久しく所得調査の爲欠勤したれば銀行へ出勤す。林義治来行して二百円の預金をくれと云ふ。他に債権あれば之を払戻さず。放課後松下修一郎を呼びよせ原守国事件一万四千円の現金にて解決の由を申込む。松下の処へは飯田病院の債務整理其他に付整理問題輻奏する由を聞く。次に代田弁護士来行して伊那依託の問題に付告訴状を出す事に付て其の告訴を出す様に作製（成）し貰ひ度由申込む。マセ口（馬畝口）一作小林善次郎の旧宅を猪佐雄の口入れにて買取り其れへ分家する事となり、其の家移りの宴を開く。之に招かれて午後七時帰宅。直に向向く。大勢の来客にて折を付けて宴をなす。来客廿名計りなり。猪佐雄、中島、泰治、丸岡や等あり。飲酒は禁に入るを要す。近来毎日連続して飲酒するので身体よろしからず。銀行の種々の問題に付ても突然思ひ付きたるまゝ、提出するので単純くくと云はれて思ふ様に仕事出来ず。

発信 信作。

受信 春日賢一、上京、信也を見舞。上柳元三、退院。社会の今日 鈴木喜三郎政友総裁となる。

【語句の説明】鈴木喜三郎：一八六七—一九四〇年。司法官僚、政治家。一八九一年帝国大学弘法科を首席で卒業後、平沼麒一郎系の司法官僚として活躍。一九一四年司法次官、二三年検事総長、二四年司法大臣。二五年立憲政友会に入党し、義弟・鳩山一郎や森恪らを中核とする鈴木派を形成する。二七年内務大臣。犬養総裁の遭難後、床次竹二郎を後継に推す勢力を退け、第七代立憲政友会総裁に就任した。

#### 五月十九日 木曜

晴曇。組合支所に行く。製糸部決算を通覧せり。尚又青山と役員賞与に付き本年は一割引の七百円を計上する事とせり。午前十一時迄居りて後銀行に出勤す。頭取と放課後の研究に付相談せしも事業時間中にせよとの命により之には反対したるも、頭取は悠々四時半退行して相談にのらず、両支配人と共に不動産担保及債権確保に付如何にすべきかに付研究せしも、他の行員を加へて相談する事として明日に研究を譲る事とせり。小倉来行して雑談を交ゆ。放課後吉野福一より会見を申込来りたるを以て荒川に於て夕食を喫しつ、会見せるに、座光寺久男が県社会課の招聘により県へ行く事に付き話あり。之れは何とかして座光寺の留置策を講ずべしと予の意見を述べ。朝今村与一郎来訪して下腕屋東の道の話をしたるに、父も大に折れて出で何とかして下腕屋南に道路を付ける様試むべしと告げ、与一郎も言葉やさしく言ひたる為納得して去る。朝鮮人の強迫を猪佐雄になしたるにより猪佐雄苛つて警察につき出したる話ありたり。

予記 猶興社を訪問せり。

発信 春日先生。元三。

社会の今日 鈴木喜三郎政友総裁となる。

五月二十日 金曜

曇雨。上飯、銀行へ出勤す。銀行の整理事務に付ては之れか統一邁進に付如何にすべきかに付て研究するの要ありたるも之れか統一出来ざりしが、決心して之を整理するの要ありとして手續等につき如何にすべきかを相談すべく両支配人、吉川、関島、木下の数名を介して議を練る。平素の銀行事務とは異りたるを以て休業銀行に於ては整理事務を主とし、此主とすべき事務に付て不統一ならば却て害ありとなし徹底的に整理すべき様決心し、新井下条支店長を召致して牧野を五月限り休職とせしめたきに付、君より話してくれと頼みたり。又同時に伊那町支店加納を招致してホッテアリ、如何にすべきを云ひしに他は立替金なれは雑処理する事とせり。

社会の今日 軍部と政党と争、軍部は強力内閣を主張す。

【語句の説明】 新井下条支店長：新井岩男。百十七銀行下条支店長。

五月二十一日 土曜

雨。組合本所にて製糸部決算に付其下調査の爲出張す。石原監事も来り検査の相手をなす。其の方法次の通り。製糸の能率、副産物の出来高、経費等につき前年と比較対照する事。午後二時半迄本所を石原と共に検査して午後二(三)時上飯、銀行出勤す。自動車中に県組合課の某居り話を聞くに、信銀の総会は暴力によつて決定せず解散せりと云ふ。北信地方の農民の窮状南信の比にあらずと云ふ。銀行放課後

両支配人及課長級と整理問題に付き協議す。猶小原辰野支店長を召致して吉江章雄の休職に付き打合したり。仍て小原をして吉江に其旨を懇談すべき様申伝ふ。銀行整理事務に付ては木下栄治郎ら事に当る事となる。

夜市場喜代来訪し養子を松島音松の二男を貰ふ事の約束忠次郎を介して出来たりとの話を聞く。仍て喜代より改めて仲人を願ひ度しとの事なりしも家内相談をして御返事する旨を答ふ。

発信 新日本同盟。

受信 勤労党。

社会の今日 西園寺公上京し強力内閣の民意をくむ。

【語句の説明】 ①信銀：長野県下の市町村、産業組合などと広く取引していた信濃銀行は一九三〇年一月六日に支払い停止を発表し、県内に極度の不安が広がった。同年一月二三日、信濃銀行は整理案を発表したが、預金者は納得せず、各地の預金者大会が紛糾する事態が一年ほど続いた。

②小原辰野支店長：小原眞一郎。当時百十七銀行辰野支店長。

③新日本同盟：田沢義舗、後藤文夫などが参加して一九二四年一月に結成された団体。政官財界人を組織し、表向きは「精神団体」を自称したが、水面下で政党結成を目指して活動していた。

五月二十二日 日曜

晴。組合支所より本所に行く。人心悪化し財界極度の困憊に陥り村内にも其日の食糧に窮するもの多く出づ。組合にては毎日四、五人の困窮するもの来り、救済方を申出ずるもの日に多し。養蚕は生繭一貫目に付金二円を予想せられ、他に稼業なく農村愈々窮乏す。今村太六

は米をネダリに来れりと云ふ。組合へ電話にて小池慶治郎より村田屋へ来られたしとの報に午後三時上飯、村田屋本家にて小池に面会す。彼は村田屋の書画骨董の売方を周旋し、宮沢彌の山林の売方を周旋す。宮沢彌は其所有の山林を売却して借金の支払に充当せんとして彼を頼みたり。彼は屋敷及前沢へ訪問して種々打合を行ひたりと云ふ。夜に入る迄話して後、三宜亭で喜右衛門及彼と新緑の木陰に憩ひて夜十時迄話して予は十一時帰宅。

吉川医師を聘して父の診察を乞ふ。血圧215あり。宏、足の裡を化膿せしに切開治療をうく。和氣子ハシカなれとも医師をきらいて診察をうけず。

予記 軍部と既成政党と反目し、軍部は強力内閣説を持して動かず。愈々反目甚し。政党の財閥と結ひて不正を働けるを憤る民心は一般に首肯せられたり。国家愈々艱難にして一步を誤れば内乱を生ずるか如し。人心悪化して盗は横行せんとす。借りた物は不払にし借倒は常ならんとする人気あり。

社会の今日 斎藤実の内閣組織の命下る。

【語句の説明】 斎藤実：一八五八―一九三六年。海軍軍人、政治家。

海軍次官、海軍大臣、朝鮮総督などを歴任。五・一五事件で犬養内閣が倒れ、政党による単独内閣の継続が難航する中、五月二二日に元老西園寺公望が後継首班に斎藤を奏請した。同二六日、斎藤は政友会・民政党・官僚・財界・軍部・貴族院から閣僚を得て、挙国一致内閣が成立した。

五月二十三日 月曜

雨、晴。直に上飯、銀行に出勤す。父の病氣、組合の状況等を考ふ

れは銀行へは出勤するが無理なり。然れども責任もあれは止むなく銀行に出勤す。吉田組合宮沢、神名沢唯七の兩名が乗込て来て、当店預金の支払を請求に来たので面接した。午前中はそれが為に費〔潰〕へた。午後組合の役員会に出席した。問題は来る廿六日の惣代会に於ける提出問題、昭和六年度製糸部決算と奨励品種無代配布の件と伊那社問題へ湧川の破綻に基く未回収金五万円の欠損を伊那社積立金より補填せる為、日蚕会社の立換金を補填する為、その積立金三万円と糸聯との肩替金を以て糸聯出荷に変更するの件を以て其場を糊塗せんとする案、之れには県よりの助勢あり、之に対して其態度を決せんとする事。右補填に反対し時によりては脱退を辞せず。依て河野組合に電話を以て、不出荷組合の協議会を開く事に電話を以て交渉す。其他事務上の件につき農山漁村低資は全部貸付の事、購買品の保証貸出等につきて協議す。午後七時帰る。慌たしき日にて少時の私用の時間を欠く。和氣ハシカにて病臥す。

予記 大命斎藤実に下る。併し強力内閣を作らんとするの希望あるらし。但し骨董品の陳列の如き内閣を組織したりとしても其命数や知るべきのみ。

社会の今日 大命組閣を斎藤実に下る。

【語句の説明】 伊那社問題：湧川は湧川合名会社。同社は横浜の内売込問屋であり、伊那など地方の製糸家から集めた生糸を輸出商に売り込んでいた。下伊那郡の製糸組合のうち二四組合が加入する有限責任下伊那生糸販売組合連合会伊那社では、湧川の倒産に伴い生糸売掛代金の回収困難に陥っていた。州平ら伊那社側は長野県に低利資金貸付による救済を求めていたが、県側はその一部を伊那社内部の連合会積立金から補填するよう要求していた。

五月二十四日 火曜

晴。冷氣あり。天気よろしけれども冷氣あり。犬塚が頼三樹三郎の書を持参し父之を買ひ150たりとて大に喜ひつゝ、見居たり。依て其書を見るに其出来凡ならず。予は朝直に銀行出勤して銀行の事にて午後六時迄没頭す。理髪して帰る。兼て近藤代書人に依頼して父が財産を信也に売買の登記をなさんとし、其の土地の登記せるや否やを調査せしめたる処未登記もの多し。依て其登記費の予算を立て、見るに、全部保存登記より売買の登記をなさは五千円を要すべし。之れは近藤代書人の概算なり。故に此不況の時に於て全部を登記するは経費を要するを以て、之を1—3位に止めんとす。組合には行かすして明日午後は役場へ村会に出席し、河野へは江塚氏又は専務を派する事とす。

頭悪しく書を読むも脳裡に残らず。空々として去る。

予記 軍部の強力内閣支持と、一般国民の政党の財閥と組して悪政をなせるを憤るとにて、組閣斎藤男に降下せしも果して此内閣永続性あるや否や。

発信 関島余四郎。千代田商会の件。

社会の今日 組閣の大命降るとも早速は閣員決すまじ。

【語句の説明】 頼三樹三郎：一八二五—一八五九年。江戸後期の儒学者。頼山陽の三男として京都に生まれる。幕末期に尊攘派の急先鋒として活躍。安政の大獄で捕えられ、死罪に処せられた。

五月二十五日 水曜

曇雨。銀行を欠勤して組合支所に行く。蚕業試験所を訪問して増田氏に面会を求め、組合よりの曾て家族会に頼みたる礼として金五円を贈る。同試験所原蚕の飼育状態を見て、増田氏の案内により限なく

視察す。再び組合本所に帰り休憩して村会に出席す。父の志によりて此回山林組合規約改正せられ、新議員選挙により当然予は父の志を嗣き後継者として選出せらるゝを思ひ予は選挙委員となりたり。委員即ち竹村要人、石原、青島と鋤柄の五人なり。新井としては適當なる人物なければ予は自ら之に当らんと申せしに、暫くして竹村、石原は予を招きて此際君の為に山林議員は遠慮せらるゝを得策とせんと申込まれたるに付、予は甚た不本意乍ら之を猪佐雄に譲る。竹村要人の言は、新井としては政治的有力者は猪佐雄を置いて他になしと云はんばかりに予に勧告す。石原も此際君が出るは将来不得策なりとて予に勧告せり。依て予は之を思ひ止まる。此不面目は心髓に徹し将来決して村の名譽職とならざる事を心に決す。併し色には表さずして帰宅す。村会終了して村土木委員の道路検分あり。雨中を同伴して帰る。終りて晩酌を橋本屋に於て喫す。

今村与一郎の求に応じて原勇三氏へ紹介状を書く。

夜悪夢に犯さる。和氣ハシカを病む。

【語句の説明】 ①新議員選挙：一八九〇年以来、山林の経営は松尾村、鼎村、上飯田村、飯田町から構成される一町三ヶ村組合が行っていた。一九三二年に組合の名称が松川入山林組合に変更された。同時に規定が改定され、組合議會議員定数は従来の二四名（うち松尾村九名）から三〇名（うち松尾村一名）に増加した。この選挙で松尾村からは吉川亮夫、金井政一、森本猪佐雄、松島乙次郎、江塚佐三郎、木下千之助、竹村要人、田中馬太郎、代田彦一郎、斉藤定四郎、木下仙次郎が選出された。

②村土木委員：当時の委員は竹村要人、森本猪佐雄、奥村嘉三、木下仙次郎。



五月二十六日 木曜

晴。午前中銀行に出勤す。松下修一郎に電話を以て原守国事件を問ふ。当方の主張と先方のと千円の差異あり。故に如何にせんかと苦慮せりと云ふ。然らば兎に角其俣にせられんを望みて置けり。正午組合本所に於て惣代会開かれたれば本所に行く。製糸部決算及蚕種無償配布の二件なり。後の問題に付、統一社に製造を依託するは余りに之を庇護に陥るの弊あり、松山の如きは品種統一の美名にかくれて或は他の製造業者を圧迫する結果にならん等云ふものあり、議論尽きず。依て青山専務は、統一社中の最も優良なるものを選出して之を一ヶ所に集め、其繭によりて良き蚕種を作り之を無代配布となさんと云ひたれば、惣代もそれならば宜しとて遂に決議して去る。惣代会六ヶ敷からんと思ひしも、結局何事もなく終了す。

本年は桑の繁茂よく肥料はなけれども葉の色もよく其の延びよろし。タケノ午後二時山本へ帰る。宏、足の疵治す。

予記 斎藤内閣出来たり。

社会の今日 斎藤内閣組織決定す。併し短命ならんと世評あり。

【語句の説明】統一社：合資会社松尾蚕種統一社は、統一ある良種を安佃大量生産して養蚕・製糸業の需要に応えるため、松尾村内の蚕種業者を合同して一九一八年に設立された。一九三七年下伊那郡蚕種共同施設組合大龍社の結成に参加した。

五月二十七日 金曜

晴。吉川同伴して銀行から橋爪、木下の泰阜土地を調査に行く事となり、午前七時伊〔那〕電にて時又迄行き、それから千代法全寺迄自動車、法全寺より徒歩で山を登る。新緑の山々々々、杜鵑の声も涼し

く聞ゆ。山間の小山田を耕す、不況の為、特に田に注意する様にも見うけられる。木下信の番頭松島七郎と云ふ男も同導して峠を越す。打沢、鋤不取等を越へて平島田の役場に至る。土岐村長不在、野原助役へ乞ふて土地台帳及分間箱の閲覧を乞ふ。よく見せてくれ、写して其の大体の所在地を確かめたり。松島も同して行く。午前十一時より午後二時半迄、かくして小字等所在地を調査し、予め頼み置きたる秦野維男及竹折藤一の二人も役場へ来りて共に研究して村内橋爪の入担土地を案内せしめて、門島駅（未製）に下り門島館に宿す。三信鉄道の高き石垣を見るに崩れそうなり。新緑と天竜川、杜鵑初鮎、季題を表れり。山と流れに対して座す。阪本の流込土地、売戻出同して、秦野、竹折の周旋にて売却約出来たり。ブローカ、秦野、竹折等と夕食を喫し、家の娘に給仕せしめて山の中のノンキな気分となる。

予記 朝、支所に立寄れば、江塚昨日の伊那社総会に出席して、松沢より松尾組合も九月迄の生命なり等云ひ居る由を聞く。猶江塚の取立説等あり。之れか予の又頭脳より去らず。

社会の今日 新内閣に長続き期待せられず。荒木陸相の留任は批〔非〕難多し。

【語句の説明】①法全寺：瑞衍山の法全寺。下伊那郡千代村にある臨濟宗妙心寺派の寺。一二七六年開創。

②土岐村長：土岐米造。泰阜村収入役（一八九八年～九九九年、一九〇九年～一〇〇年）、村会議員（一九一一年～二一年、二五～二九年）を経て、泰阜村村長（一九三一年九月～三二年十一月）。

③野原助役：野原文三郎。泰阜村助役（一九三一年十一月～三二年六月）。

④竹折藤一：泰阜村助役（一九二四～二六年）を務めた。

⑤荒木陸相：荒木貞夫（一八七七～一九六六年）。陸士九期、陸大一九期卒。参謀本部第一部長や第六師団長などを歴任し、犬養内閣で陸相に就任。齊藤内閣成立時、次期陸相には林銑十郎が予定されていたが、林の固辞により荒木が留任した。荒木の留任に対して陸相更迭による軍記肅正を期待していた政党側は批判していた。

五月二十八日 土曜

晴小雨。朝三時夢より醒むれば銀行問題、組合の問題等脳裡に浮ひ出て、眠られず。組合の不況に対策を如何にすべきか、如何にしてハランスを縮小すべきかに付、千々に心をなやます。若し信聯から資金が出なければ如何にすべきか、若し資金の調達に行つたらば、如何になるであらふか等考へ合すれば、山宿に居ても財界に対して如何にすべきかに付ては良案浮はず、其内に起き出て、便所へ行き再び寝に付く。朝六時起きて、吉川と産組の如何にすべきかに付きて相談せるも相手とすべき程になし。七時宿を出て、温田に向ふ。へ正と云ふ途中の小製糸場に、秦野、竹折の兩人に会する約束して行き、温田の橋爪入担田地を見て、丸木屋（外科）に投ずれば、昨日同行したる七郎居り、外科の木下より入担土地を雨中に実査して丸木屋にて昼食し、帰途温田飛地を調査して七郎、秦野、竹折と分れたり。予と吉川とは南宮橋を渡り大下条一笑亭に来る途中深見池を見る。阿南龍東地方は猫額大の土地をもよく耕作し居り其不便なる事、想像にも及はず。一笑亭より自動車帰宅、午後七時。

五月二十九日 日曜

晴。朝市場喜代を呼んで、彼の養子を貰ふ事に付て媒酌人として彼

から頼まれた話を聞くに、鋤柄忠次郎の世話にて、松島音松の二男を貰ふ事に話出来、昨廿八日酒を入れたとの事を聞き媒酌人としての勞をとる事に承諾を与へたり。〔中略〕。午前十時組合支所に行く。青山にハランスを縮小すべき事を極力申渡す。

松沢数一か予に対する悪口を聞く。之れは、銀行が十三万円の信聯よりの借入金に關してとりたる彼の不満もあるらしとの事なり。本所に行きて事務員従業員の製糸部賞与金分配案を作る。前年度を基準として双方の分を大体分配する事とせり、本年は昨年650に比し500円を分与せり。猶貸付金整理に当りては、入担せしむべきものに対しては此際入担せしめ他日に備へる事とせしめ、購買品に關しては不日現金制度とする事を申渡し、自給自足主義をとらしむる事とせり。組合貸付金整理、購買事業大体方針を青山に授けたり。元伊那社の座光寺来組し、工程と経費に付き話して去る。

予記〔略〕。

発信 山本父、京都土産の礼。富田租。

社会の今日 養蚕地方の没落の時が来た。

【語句の説明】松沢数一：長野県信用組合聯合会飯田支所の主任書記などを務めた。

五月三十日 月曜

晴。養蚕の革命、養蚕地方の没落の時が来た。伊豆の初取引は二十二三掛を示したけれども補償糸の善後策か米国のジャリーとうまく行かない。

聯合事務所に出頭して原幹事長に面会したいと思ふて出かけたか、不在の為面会出来ず。産業部会から役員としての慰労品ウスバタを贈

られた。其の礼も述へるべく行つた。(後略)。

銀行へ出勤した。松沢がやつて来た。彼に、予が悪口を言ふ事はよ  
いが衆人の前て言ふ事は止めてくれと言ふた。彼は予が産業組合とし  
ては不適任である事を反駁し、大に議論した。彼は松尾の組合は危い  
から資金は出せないと云ふた。又彼は予に組合の仕事に没頭して居村  
の為に尽せと云ふた。予は之を友人の忠告と聞いた。組合経営の大綱  
は握つて居れ、江塚と再び松沢に面会する事を話して分れた。組合一  
工場に於て凍豆腐模範工場の解散式を行ふた。模範工場は組合か竹村  
より買取つた。

宮沢弼が来訪したが、面会せず。

予記 産組と銀行との関係に付て松沢と懇談した。予の大に考慮を要  
すべき時に際会した。

沢村屋と福住の講に付て話した。金が集まらないので困ると云ふ事  
であつた。電話で松下氏と蕉梧堂を伊那電に売る事も賛意を表して置  
いた。

【語句の説明】 原幹事長：原貞治郎。 県産業組合調査会幹事長。

五月三十一日 火曜

曇。組合支所へ行つた。江塚佐三郎と話して信聯飯田支所に松沢を  
訪問して此難局に処する方法に、特に松沢の意見を聞き、且信聯より  
資金を仰ぐ方法を講すべく彼と話しを定めた。青山も来組して之を打  
合せた。然る後上飯、銀行に出勤した。山口取締役が来行した。塩原  
も来た。江塚が来行して原田支配人に預金払戻に付て交渉せしめた。  
それから江塚の來行の交渉終つて信聯に松沢數一を訪問した。松沢は  
松尾組合のハランスの大に過ぎる事に付て警告して松尾組合の危機を

警め、此際江塚佐三郎の入組して献身的に組合の為に尽され度しと申  
渡した。江塚も父の遺業であるから之を承諾して精神的訓練の必要を  
説いて、組合員をして此難局に際して一生懸命乗り切る事を勸説した。  
松沢の言は切によき忠告であつた。吉江章雄が退職に付、返礼に來た。  
今日此ハランスを見て如何に組合を乗切るかに付ては大に考慮すべき  
ものかあると共に、一面革命はあるべきものと想像せられん。如何に  
処すべきかに付ては、殆んど一種の蠅追の感もあつた。

予記 山口氏は東京の人心の悪化を警告して革命前の東京であり革命  
は避くべからざるものと告げた。

六月一日 水曜

雨曇。銀行へ出勤した。政界の動揺、強力内閣の無力内閣、骨董品  
を集めた内閣か何か出来様ぞ。真に強力内閣は今迄の政界に何等の情  
実を有せない野武士的英傑に依つて行はれる。斎藤内閣の如き木と竹  
と接き合せた内閣に何か出来様ぞ。滞貨生糸問題も紛糾して糸価は奈  
落の底に陥らんとして居る。午後銀行で睡気か催して居眠りして居た。  
午後になると居眠りに出て仕方がない。組合の事も気にか、つて仕方  
がない。組合員を率ゐて至誠天地を動かすべき事をやつて見たい。併  
し現在の地位にありてはそれが出来ない。蚕糸郷の没落の日に當つて  
之を救ふには昔の熱誠でなければ駄目だ。併し知りてもそれが行はれ  
ない今の自分の身の上だ。銀行の方も此不始末の上に何とかして活路  
を見出さなくてはならない。けれども村も大切である——と云ふ様な  
考か胸にこみ上げて却て頭かポトする。椀屋か生瓜の曲つたのを持  
参して晩酌に來た。中島の三郎の病氣も訪ねてやらねばならん。家事  
も相当にあり父も追々病氣が進む様である。内外共に多事である。

予記 組合の資金一万円信聯より手形で借り入れの手形を造り調印した。

発信 税務署、送金。中原病気の礼。

社会の今日 臨時議會開かる。

【語句の説明】①滞貨生糸問題：一九三二年四月二五日、政府は全ての滞貨生糸を補償生糸融資銀行団から旭シルク株式会社に売却させることに決定した。その影響で、生糸価格は三九〇円という前例のない安値まで下落した。結局三二年六月の第六十二回帝國議會において政府は「糸価安定融資担保生糸買取法案」を提出し、約一〇万俵の生糸の政府買上により、糸価の平均六〇〇〜七〇〇円台の維持を図った。

②臨時議會開かる：第六十二回帝國議會（会期六月一〜十四日）。昭和七年度追加予算案、同年度一般会計歳出財源充当の為の公債發行法案をはじめとする法案二十件が成立した。特に衆議院に対しては、議會開会と同時に長野県・茨城県を中心とする自治農民協議会によって集積された多数の農村救済請願が呈出され、同じく上京していた北信不況対策会の活動と共に注目を集め、農村救済要求運動の更なる活性化を招いた。

六月二日 木曜

曇。部落の者予に対して好感を有せざるが如し。之れ予を見縊りたるもの、如く予に対してモットキツクヤレと云ふものあり。押の一手あるのみ。

組合支所にて青山、江塚と組合事務に付打合せ、信聯より青山、江塚と予の三人の手形にて六月十一日期日を以て一万円借入れる事とし、

此資金を以て製糸部決算資金とする事とせり。後出飯して安田銀行に行き、父より依託の公債五千円の利札次足の為公債証書を預け置き、利札二百四十五円を現金にて受取り大滝氏と話して帰る。信聯に松沢を訪問して現金一万円受取りて銀行に出勤したり。又購聯にも顔を出して中田と醬油売上問題に付て話し売上を頼みて帰る。大平堂にて中島の三郎に病氣見舞として菓子を買ひたり。組合へ一万円を市村に渡して帰る。

養蚕四眠に休まんとして居る。糸価四百円を割り暴落底知れず。小作人に会へは養蚕を止めて田に桑を植へたるものは水田に還元する様勸告せり。政界財界共に前途不安にしてその日／＼を送る。銀行へ座光寺久男来訪して県庁社会課入りを告げ暇乞いに來る。吉沢愛助遺稿を作るとの事には賛成す。

予記 組合の事にてクズ物の売に付て原安雄の斡旋にて鐘紡へ売る事に付賛意を表す〔後略〕。  
発信 代田千章。

【語句の説明】①座光寺久男：一九〇七〜一九七八年。下伊那郡上飯田村出身の青年運動家・地方官吏・地方政治家。上飯田村役場に勤める傍ら下伊那郡青年会、猶興社などの運動に携わり、一九三一年八月、愛国勤労党南信支部の結成に際して書記長となる。三二年六月、長野県学務部社会課社会事業係の書記となり、以後社会課畑を中心に県職員として勤務。戦後、飯田市助役、駒ヶ根市助役を経て、一九六八年から駒ヶ根市長を二期八年務めた。

②吉沢愛助：一九〇四〜一九三一年。飯田町に生まれる。上飯田村書記、上飯田町青年会常任委員を務める一方、郡青年会の左翼的傾向に反対し、上郷、龍丘、泰阜などの青年会と協力して郡連合青年会

を結成。上飯田町青年会常任委員長、郡連合青年会常任委員長を歴任した。二八年上飯田町図書館を創設し館長に就任。死後の三四年に『吉沢愛助遺稿集』（吉澤愛助氏遺稿集刊行会）が出された。

六月三日 金曜

雨。子供の下駄傘等がないと云ふてグザる。ゴム靴は破れる。雨は梅雨の様に降る。組合て製糸部決算を始めたのでドンナ様子であるかを見るべく支所から本所に行つた。昨日の一万円が資金としては充分である。平静な状態である。上飯して銀行に出勤、時に正午。頭取は退出した。

放課後六時迄かゝりて担保品調査に費した。担保品の調査、其不足分を如何にするか等は正に調査課に於てなすべき事である。調査課の脳力を發揮せねはならん。今迄の調査課は殆んど現業の相手をして居た。之に対して監査し調査して担保品の価値の下落、之に対する対策を講ずる事、預金者の信用及社会一般の信用状態を調査するのが調査課の役目である。之に気が付いた。放課後入担土地の状況に付て充分貸付課及其他と協議した。仙寿楼に岩崎藤の満州行、青柳東日記者の上田転任の送別会があつた。之に出席した。芝原校長と隣席して話した。午後九時苺を買ふて帰つた。

予記 座光寺久男の長野行に関して吉野と打合せた。山本から五条阪に焼いた春山焼を久が持参してくれた。犬塚へ寄て助宗刀代廿一円を払ふた。松尾郵便局から所得調査員の手当金五十円六十四銭貰ふた。

受信 千章。

【語句の説明】芝原校長：芝原彦十。当時下伊那農学校校長。

六月四日 土曜

雨晴。養蚕四眠中なり。東京日々新聞記者青柳甲子雄上田へ転任の爲、午前八時廿八分飯田駅出発見送りて上飯す。大勢の見送人なり。凡そ五十名も居たるなるべし。新聞記者と云ふものは無責任なるものにて男子の職業としては文明の利器を持つを以てよき職業なりと思ふ。青柳は単なる新聞記者にあらずして地方文化の爲尽せる功大なり。次に午前十時廿八分座光寺久男か県社会課へ囑託として行くを見送る（之れは五日の記事）。

〔一行空き〕

終日銀行業務に携はり伊那委託倉庫が詐偽をなしたるに付、之を告訴するや否やに付放課後代田弁護士の告訴状を前にして研究せり。併して結局之を告訴する事とせり。

座光寺久男か県社会課囑託として県に赴任する為信濃国民新聞社に於て社員の送別会あり。荒川楼に於て行ふ。之に出席す。粥川其他知人來り凡そ十五、六名なり。十一時帰宅す。

近來頭脳悪し。

社会の今日 臨時議會開かれ活気なき挙国一致議會なり。

【語句の説明】①青柳甲子雄：長野県出身の新聞記者。一八九六年生まれ。一九二二年信濃毎日新聞に入社、二六年東京日日新聞に移る。一九三〇年九月に国民精神作興会が徳富蘇峰の講演を開催した際、蘇峰の招聘に協力していた。一九三二年六月に東京日日新聞飯田通信部から上田通信部へ異動している。

②信濃国民新聞：一九二六年に発刊。上田市に本社がおかれ、毎月二回発行されていた。

六月五日 日曜

晴。青柳東日記者を午前八時半飯田駅に見送る。金田と共に銀行へ帰り話し、再び午前十時半座光寺久男が県社会課の嘱託となりて赴任せるを見送る。座光寺は猶興社及信濃国民新聞の未だ基礎確立せざるに之を去りて、一、二年家庭の事情にて郷里を遠くとて県へ行く。座光寺か去るは下伊那の青年をして我々の主張を青年に鼓吹し青年を教養するには不便なり。併し彼としては止むを得ざる事なるべし。見送れるもの五、六名の社員同志なり。正午組合支所に来りて午後一時より理事會に出席す。予は財界の大勢と世界の財界の大勢を論じ、峡谷としては昨年百十七銀行の支払猶予以来金融梗塞の結果組合員に不安を懐かしめざる為虚勢を張りたるも、金融界も稍落付たるを以て組合の将来を思ふとき寒心すべきもの多し。故に此際組合員と組合との間の了解を得て其距離を遠からしめざる様、一方又不安を懐かしめざる様努力を望む旨を理事會に於て述べたり。龍門寺に丘山和尚を訪ね布教伝導講に付話せり。

六月六日 月曜

曇。養蚕視察の為銀行を欠勤して午前七時本所に集まる。先つ毛賀より始めて各蚕種家の原蚕を見るに皆よし。桑の延ひ方と肥料の少なきに拘らず天候よろしかりし故に、尤もよろしく新梢六割はあると云ふ。桑葉はモギ一貫目に付五、六銭を唱へつゝあり。毛賀にては三石謙、塩沢忠、木下某より城等を見て明の田中句一郎、東太郎、喬木館を見て本所に入り、昼食後八幡大塚、木下富、鋤柄忠次郎、塩沢新九郎、石原阪を見て春山にて終結し帰宅す。釣魚に行き甘尾計りを獲たり。一般の養蚕は生糸価安ければ(四〇〇)気乗薄し。農会より塩沢

治雄来り合流す。田に桑を植へたるものは堀りおいて水田となすもの多く、本年水田となるもの四十町歩位はあらんと云ふ。春蚕種は掃立六万二百五十瓦ありと、農会の調査の結果を聞けり。銀行の方の要あれば落付きて組合の仕事も出来ず。

自宅養蚕五令二日目なり。

社会の今日 補償糸問題解決し政府買上を決す。

【語句の説明】①塩沢新九郎：松尾村水城耕地地委員(一九二〇)

三三年)、元村会議員(一九〇七—一三年)。

②塩沢治雄：農会技術員。在郷軍人會會長(一九三〇—三四年)。戦後、村会議員(一九四六—四七年)、村長(一九四六—五一年)などを務めた。

六月七日 火曜

曇。午前中銀行へ出勤した。小池氏が昨日東京から来飯して来行したけれども、頭取も予も二人ながら欠勤で、小池氏が重役に話が出来たが、朝出勤して金田から小池氏の来行を聞き、蕉梧堂から来て、政府よりの不動産金融を如何にすべきか——飯田の地元銀行にて政府に対し此の様な高利にて年限は二十ヶ年とするも、反当二百円以上の貸出とする事等につきて小池氏の意見に基き、地元三銀行か寄り合ふ事に話を決したり。猶当行の方針として如何に進むべきかに付打合せたるに、現在の方針を以て進み、万一最悪の場合とならば日銀株を売りにて預金を買入れ、相殺の具として差支なき事等を話し合ひたり。午後二時村役場に於て村税等級割の村会あり、出席す。稍遅刻して出席せしが別に何等の新味もなく終了して、帰宅すれば上柳緑来訪し居り、元三の養子に貰はれる話等ありて父も喜び盃を重ねたり。

桑安価にして売られず、一貫目モギ五錢を唱す。

社会の今日 滞貨生糸処分決し、議會へ法案提出となる。

【語句の説明】 小池氏：小池寛。一八八八年長野県生まれ、一九一九年京都帝国大学法科大学政治学科卒業。一九三二年当時、郡山合同銀行の常務取締役を務めていた。

六月八日 水曜

晴。神經衰弱を来したるが如く、村会へ出ても組合へ来ても何となく人の言ふ事なす事皆氣に入らず頭腦ムシヤクシヤす。午前中銀行に出勤せしに、仕事山積して何れより手をつくべきかに付き氣のみあせれとも仕事は出来ず。信産伊那頭取を集めて不動産資金貸の問題を頭取より出したり。午後二時退行して村会に出席す。戸数割あり大体の案を決したり。次に予の戸数割に付て、森本はよいと云ふ議論出て（木下歌一、青島等）たれども、各人の所得の計算に於て既に役場の見立は畢る。土地は地租割をとるを以て一般に所得に付て考究すべし。予は徒に人の宣伝によりて等級を上下するは宜敷からず、若し之を變更するとせば或は大異動を来すべしと警告せり。併し村会の大体の空氣は予の等級を以て安きに失すと云ふもの多く、予は失言をなし（組合によりて其資産を調べたら如何と云ふ）後悔せり。村会終了後吉川と百十七Bと信産との間の件につきて話ありたり。釣に行く。風吹き多くを獲られず。

蚕種家巡回に付蚕業試験所と話す。

【語句の説明】 信産伊那頭取：信産銀行頭取・市瀬明と伊那銀行頭取・田中太三郎。信産銀行は一九〇〇年飯田町に創立、伊那銀行は一八九七年飯田町で創立（初代頭取は田中太三郎）。一九四〇年に

信産・伊那・百十七の三銀行が合併して飯田銀行となった。

六月九日 木曜

晴。雷氣。午前八時半蚕業試験場長来組するので之を利用して蚕種統一社の連中を統御すべく、各蚕種家を巡視せしめたり。先づ鋤柄角太郎より始め石原喬木館等を巡視して組合本所にて昼食し、毛賀方向を予のみ省略して午後上部を巡視し、最後に犬塚に至り犬塚より鳥清に入りて場長、青山江塚、吉川の五人にて夕食を喫して分れたり。蚕品種統一の為よく尽したり。午後九時帰宅。

原稻太郎来り庭園植樹の手入を施す。

弁天松森の檜の皮をむきたるものあるを發見せり。

養蚕五令五日目なり。

予記 呻吟語に曰く、政治家としての資格を左の通り定めたり。

寛厚深沈、遠識兼照、藏（造）福無形、消禍未然、無智名勇功、天

下陰受其賜

とあり。考ふべし。

受信 建部博士。

【語句の説明】 蚕業試験場長：県蚕業試験場長の水井壽一郎か。

六月十日 金曜

晴。午前中銀行へ出勤し、午後退行して組合の用事にて、城、清水等養蚕家を巡視す。城は熊谷平一をして案内せしめ養蚕家にして組合員全部を巡視するに、城には組合へ繭を供せざるもの相当にあり。之れ竹村要人輩か逆宣伝をなすに始まれるものなるべしと思はるも、供繭せざるもの数戸あり。之を一一調査して巡視せり。清水は組合の精

神徹底しヌキ売りする者等は皆無の如し。一般農村としての純朴なる点も多し。清水は佐々木理事をして案内せしむ。城に比して清水の方は養蚕も熱心なれば成績もよろし。日没頃迄に両耕地を巡視して帰る。弁天の畑、松島卯之吉より返戻せしめたるもの水田とすべく検分す。

道路未開通なれば之を開通せしむへく、金田政五郎の家〔屋〕敷が移転を要するに付注意せり。

一般に桑葉不足を憂ひ春蚕掃立を控へたるに付桑剩る。桑の芽吹きよく棒桑にして新芽六割以上なりと云ふ。

社会の今日「農村モラトリアム」「平価切下」等の愚論百出す、議會之を採タクせんとなす。

六月十一日 土曜

晴。組合支所に於て青山専務と打合せ。要項左の通り。

一、信聯より（中金）借入資金（仮渡金資金六万三千元）を借入得る事になり役員の手形を以て借入る事にせり。信聯へ日常の資金曳出に付用意の為予報の件、肥料配給の件（購買品を此際現金売とするの件）（一）、本日の県より杉原課長来飯し伊那社の件協議の件、等を打合せして用意すべく申渡し、今日は毛賀を巡視する予定の処明日に延期せしめ併せて上飯、銀行へ出勤す。本日聯合事務所に於て組合長専務の会合ありしも伊那社の件及糸聯出荷の件なれば之を責任を負ふの恐あるに付専務と田中をして派遣せしめたり。予は銀行に出勤す。千章来行して山本へ行くとして立寄る。井出市蔵来り福沢と云ふ老婆の貯金曳出す話あり。三百円を渡して余は七月に入りて支払ふ旨答へたり。

【語句の説明】 杉原課長：杉原定寿。 県産業組合課長。

六月十二日 日曜

晴。庭師稲公来り庭木の手入れす。久雄も合し、午前中庭の模様を見たり庭掃除等して悠々自適す。午後市瀬牛太郎と共に毛賀養蚕家の蚕況を巡視すべく組合行。支所にて専務と聯合事務所に於て昨十一日奥原主事来りて伊那社の更生に付き協議し、猶糸聯出荷に付協議会の状況報告をうく。要は伊那社の更生（役員辞任）及糸聯出荷に付不出荷組合の意向を問ひ質したるに止まる旨の報告あり。松尾としては大勢に順応するより外なしと結ひたりとの事。毛賀養蚕家の視察は百二、三十戸の内百戸を巡視し午後六時半終了し、組合本所にて専務と打合せ役員賞与金分配案を作製〔成〕せり。専務と共に帰宅す。其の方針としては購買品は現金制度とするの可否、減債貯金帳の配布等に付き専務と打合せ。河合垣来訪し下椀屋東の小作地旧道路敷より石出て復旧工事に費用を要するを以て補助せられたしとの申込あり。金一円五十銭補助する事に決す。

予記 世の将来を洞察するに革命来の声は都鄙に満ち正に風雨来らんとして風雲に満つる体なり。此際如何にすべきかは念頭を離れざる問題なり。

【語句の説明】 ①奥原主事：奥原潔。 県内務部地方農林主事。

②糸聯出荷に付協議会の状況：当時伊那社が生糸検査の権限を有していたため、加入組合の一部は名目上加入するだけで生糸の検査を委託し、繰糸の指導を受けるといふ手続きによって、組合で生産した生糸を単独出荷していた。昭和恐慌の状況で、こうした出荷形態を改善するため、県産業組合課の斡旋で組合製糸役員協議会が開かれ、



組合の解散も考えるという強硬な態度も示された結果、ようやく全組合が生糸の全額を糸聯に出荷するという出荷改善案がまとめられた。

六月十三日 月曜

曇。養蚕九日目なり。上蔭に至らず。庭稲来り樹木の入手す。久雄アサヒ軍手製造機械を購入して之によりて内職を求めんとし其資金借入方に付話ありたれとも、大阪の器械商の奸策に乗らざる方宜敷かるべしと申渡す。午前中銀行出勤して行務を見る。安田大瀧氏来行して佐藤勸銀支店長来飯の事を聞く。重役に対する貸付金に付て回収方法を講究せり。

午後三時退行して毛賀の残部養蚕視察を行ふ。十一日毛賀小木曾東五郎方を巡視して東五郎氏の破顔を見たる時、拈華微笑一脈の通するものあり。将となるものは寛厚深沈なりと。予の生活は余りに几帳面なりし馬鹿な茫然とした空虚な処かなくてはいけない。今迄の予の生活は余りに几帳面過ぎた。空しくて虚なる所を欠く。之より之を以て人生の玉条となさんと深く心に感した。此日の巡視は実によい教訓を予に与へた。市瀬牛太郎と共にヒノキ一円を巡視して最後に千種屋に謙蔵を訪問して帰宅した。謙蔵アキレスのケンを切り臥床。予記 寸暇を利用して釣を試みた。十数尾を獲た。久が泊つた。発信 信也。仲神一郎

社会の今日 農村を救への声天下に満つ。

【語句の説明】①安田大瀧氏…安田銀行飯田支店長であつた大瀧安三郎のこと。

②佐藤勸銀支店長…佐藤賢治。日本勧業銀行松本支店長（一九三〇年

一二月（三二年七月）。飯田出張所長を兼務。佐藤は秋田県出身で、一九一八年東京帝国大学法科大学卒。後に同行理事を経て、四六年から翌年にかけて副総裁を務めた。

六月十四日 火曜

雨。晴。養蚕上蔭す。朝より其手伝せり。併も久も手伝ひ居りタケノも亦合し、父より公債ツギタシを持ち行きて継足の証券を安田より受領せり。銀行出頭、電話にて江塚と話し乾燥及繰糸の大体方針につき打合会を開く事に決し十七日と決す。松沢来行して伊那社問題を論し、彼が資金の運用上是非共伊那社を創造して伊那社によりて下伊那の蚕業を復活せしむべく話せり。彼は其口を極めて彼が松尾組合の将来を論し、山本、上久堅、遠山、牛牧等の組合の行つまれる状況に付資金の出資方に付聯合の急務なるを説きたれば、彼とバチを合せ那那の組合界に活動すべく約す。

放課後佐藤勸銀松本支店長来飯し共に蕉梧堂に於て夕食をとり、佐藤氏より勸銀の新資金放出に付話あり。其到底地方銀行の利用し得べからざるの名案（？）なるを聞く。曰く自体の所有不動産、肩替り、債権質（根底当、二三番抵当はダメ）皆何れも利用し得ざる画餅なり。終りて大瀧氏の宗教談と大平氏の之を批評あり。之に花が咲きたり。皆世の革変を予知す。予は戦争によりて行つまりは解決するものなりと論ず。

予記 朝直に銀行行。町村長、部会役員集合し不況対策に付て協議せり。

社会の今日 平賃〔価〕切下。農村モラの声喧し。然も其結果をわきまへず。

【語句の説明】乾燥：生繭の発蛾を防ぎ、繰糸まで繭質を損傷せず安

全に貯蔵し、繭の性質を煮繭繰糸に適する状態とするため、繭の蛹体中の水分を発散させて乾燥する工程。その方法として風乾のような自然乾燥法、高温の熱空気を用いる熱気乾燥法、赤外線乾燥法などがある。また当時、飯田・下伊那地方には乾燥機を設備した繭倉庫が多く存在し、繭入庫社の依頼により生繭の乾燥を行っていた。

六月十五日 水曜

晴。組合支所に行き青山に会いて事務上の打合をなさんとせしに青山来らず。遠山に干燥繰糸上の技術に就て打合の上上飯、銀行に出勤した。銀行を止めて産業組合に移らんと志せしも銀行の方では離さず止むを得ずイヤイヤながら銀行の仕事をなす。勸銀佐藤氏来行して勸銀の二番抵当権あるものに付如何にすべきか、今回の融資を利用し得ざるや等の質問をなしたるに利用し得ざる事を知る。伊賀良支店長矢沢来行したるに付、同支店の貸付金整理に付整理簿によりて研究せり。午後放課後\*\*屋を訪問したるに\*\*生活に窮せるもの、如し。マシ〔之〕出て来りて泣いて窮状を訴へしもなだめて去る。裡の離座敷を見て庭の樹木の繁りたること及其手入に關して状況を見たり。金田来り其幽邃境を賞す。近藤代書人を訪問して新井、中島、砂寄留の田、宅地畑を父より信也に売買登記する事として其書類を作製〔成〕して貰ふ事を依頼して去る。中原より電話にて久闊を叙し面会を求められたるも果さず。

養蚕上族するもの多し。

発信 信作。久の軍手の調査タノム。

【語句の説明】伊賀良支店長矢沢：矢沢有一。百十七銀行伊賀良支店

長。

六月十六日 木曜

曇、小雨。銀行へ出勤した。残桑も処分も出来ず、弁天の松島藤太郎より取戻した畑が一枚残桑となった。銀行へ出勤したけれども、仕事は単に世の中が悪化して、「借りたものは返さぬ」と云ふ様な気分になり満ちて居る。村長連の聯合事務所集会の此の相談が却つてそんな気分になり油を注いだ。蔵相高橋は「天から紙幣が降つて来る様な気がして居てはよろしくない」と国民を戒めた。彼が独自の立場にあるので此の如き警告は国民に向ふて発せられるのである。

おマサ按摩が来た〔後略〕。

【語句の説明】蔵相高橋：高橋是清（一八五四～一九三六年）。蔵相や首相を歴任し、当時は斎藤内閣の蔵相。第六二帝国議會での三二年度予算の成立をうけて、政府の「農村救済問題」における責任を述べつつ、国民の自助努力の重要性に注意を促す談話を発表していた。

六月十七日 金曜

曇、小雨。組合支所に出張した。江塚、吉川、田中、青山等と事務上の打合をなし、吉川には金策上の相談をした。午前中支所に居た。田間から繭が十メ貫目計り初入荷した。青山に江塚に仕事をさせる様に耳打した。組合の前途も資本主義経済組織の上に立つ以上は、資本主義制度が破滅するとせば同じく破滅の運命にあらねばならぬと思ふ。産業組合の前途も多事多難である。正午上飯、銀行へ出勤した途中、小林宣と一所になつて話して行つた。銀行へ出勤する事は何となく不愉快であり、此金貸業に従事する事が不愉快でたまらない。不愉快な

仕事に従事する事は面白くない。一日も早く足を洗ふて銀行を去る事を望んで居る。機会を待つて居る。組合の仕事、それは予の前途に希望する所があるからである。産業組合の方面を進むより外ないと自ら決して居る。吉野から猶興社出版に付て資金の払込をしてもらい度との電話があつたけれども断つた。伊那電の大原氏が銀行へ来たのを利用して奥村卓美（粥川より頼まれた）の伊（那）電周旋の話をした。予記（略）。

社会の今日 中央金庫より五百万円借入の県保証に付県会開かる。

【語句の説明】 中央金庫より五百万円借入の県保証に付県会開かる：

長野県信用組合連合会（信連）は農村救済資金五百万円の融通を産業組合中央金庫（中金）に申し込んでいたが、これに対し中金側は既に多額の資金を長野県に配給している点や県下の一般不況を考慮し、融資の条件として信連弁済不能時の県による弁償を要求した。

長野県は、中金に譲歩する形で、臨時県会（六月一七、二三日）を召集し信連借入れの県保証案を提出。同案は二二日の臨時県会本会議において可決された。

六月十八日 土曜

晴、曇、雨。中村と統一社の委託飼育家の松川橋詰の家に原蚕飼育状況を調査す。組合支所より八幡駅に出て中村氏と同行す。終つて銀行に出勤す。店頭閑として金融業の将来に付懸念せらる。午後二時辞して組合本所に行き、理事会に臨む。伊那社出荷―糸聯出荷に關して過日聯合事務所に不出荷組合打合せあり。其節青山出張したれば其旨報告あり、県より奥原来り伊那社更生と金融の暗に封鎖をホノメカシ、糸聯出荷を懲漣す。併して遂に一般の状況を見るに一部出荷して責を

逃れんとするもの、如く、当組合の態度としては月一千斤を出荷して其責を逃れんとする事に決し、猶購買品現金主義をとること、農会と組合との連系（払下米に關し）、本年製糸の大体方針に付打合せ、江塚佐三郎より御手伝位に止められたき事の申出あり。終つて従業員と理事を交へて打合会を開き、上記の趣旨を訓示す。役場に上柳の土地を調べたり。

予記 一、乾燥には従業員が自らの仕事と思ふて従事のこと。

一、工程と経費との關係を示し、能率を發揮すること。

一、道具を吟味すること。

一、生徒の訓練をすること。

一、研究の上意見を具申すること。

六月十九日 日曜

晴。四十八回誕生日に付終日家居して悠々自適せり。サブリに行きたるも獲る所なし。門前の銀等に小作せしむる田の坪数を調べたり。福住善治来訪し、二時間計り話して帰る。彼黄痘を病みしが、全快して来訪。朝顔を植へ付け釣に行きしに小沢来り居りて、之に獲たる魚をやる。悠々自適するも何となく此人心の悪化、不況は国の前を憂ひ心晴れやかならず。

予記 県下農村組合救済資金中央金庫より借入に付（五百万円）其保証を県に頼む事に付臨時県会開かる。

六月二十日 月曜

晴。組合支所へ行き、供繭乾燥の状況を視察す。十九日迄に九百貫供繭あり。正午頃上飯し、銀行出勤す。信聯支所に於て不出荷組合の

糸聯出荷に付き協議会あり。各組合は資金関係等を恐れて一部出荷する事に大体意見まとまりたるも、中には出資をして全部出荷すると云ふものあり。伊那社現在の出資を利用して一部出荷すると云ふものあり。猶種々の立場のものあり、松尾は一部出荷することを申出たり。然るに上郷は伊那社更生の意味にて一部出荷すると云ひ、結局糸聯へ交渉して後考へると予は云ひしに不同意のものもあり。伊那社は解散も出来ず更生も出来ず（原貞は更生説を説く、総役員辞任してと主張せしも政治の如く簡単には事業は行くものに非ず）、遂に進退谷まりて如何ともすべからずウヤマヤに葬り去られ一人減し二人減して遂に解散となる。近藤福平より登記の書類を送りよこす。水野\*\*\*に対して家賃の事に付話合ひがあるから来行せられたしと銀行小使をして申込みたり。水野よりは自ら作製（成）したる借家証を郵送しよこしたる無礼あり。

六月二十一日 火曜

雨、涼。父の土地保存登記に付土地台帳を調べて保存登記に付必要なる権利書を捜して之を近藤代書人に渡す。午前中組合支所にて事務上の打合をなし、午後一時上飯、銀行に出勤す。放課後重役会其他に付打合せたり。時に貴族院議員選挙に付貴族院選挙は納税額下りし為、父も有資格となり、諏訪の今井伍介勸選せられし為、之れか補欠として候補者として宮阪、林七六の両氏競ふ事となり、林氏より大平を通して話あり。金田に一任する事とせり。金田は代田外数名の投票を集めて一仕事せんと目論見るもの、如し。午後七時より組合両所に於て実上班長会を開きて、奨励品種統一社に委託して其蚕品種を作り之を組合員に配布する事等につきて打合会を開き、予は本所に出張して午

後九時より食堂に於て開き、右件に付一場の説明を試みたり。尚青山中村、蚕屋よりも説明して、午後十一時帰宅せり。一般に桑は過剰してモキ一貫三錢五厘位なり。伊沢太郎収入役の未亡人來り、父に役場の退職給与金に付て訴ふ。

予記 桑モギ一貫目三錢五ノ繭飯渡二円位。

社会の今日 社界（会）不安愈々深し。民政党分裂の兆あり。

【語句の説明】貴族員（院）議員選挙：貴族院多額納税議員の互選選挙。長野県選出の多額納税議員であつた今井五介が蚕糸業界に対する貢献を評価されて勅選議員に転じたことを受け、その補欠選挙が実施される予定であつた。この補欠選挙に対しては元県議・林七六と現県議・宮坂作衛の両者が意欲を示して対立し、県選出の衆議院議員・小川平吉が調停に乗り出していた。同選挙は八月二三日に執行され、林が投票総数百七一票中百五五票を得て当選した。

六月二十二日 水曜

曇、晴。銀行重役会ありて、午前中より直に銀行へ出勤す。小池東京より来行。其の話を聞くに東京に於ける社会不安益々深く、有産階級の恐怖心愈々多く、白色テロ横行し何時爆破せんやも知れず、財閥恐怖に恐々たりと云ふ。長野県北信よりの農村救済陳情隊奏効し、政治家の未だ農村の窮状を知らざるもの、此陳情隊により農村認識を深からしめたりと云ふ話あり。予は左の如く予言せり。「古往今來歴史を見るに平和の裡には必ず乱世あり。明治大正の平和の後に乱世あるは歴史の証明する処、今日は乱世なり。此乱世の最後は必ず戦争にて片付けるを常道とせり。故に今日に於ても最後は戦争によりて解決し、其解決は極端なる資本主義とならん。即ち国家の管理も其一つなり。

人類の本能を無視したる経済及政治はなければ人の欲望を満足せしめざる制度は永続性なし。故に極端なる資本主義とならん」等話せり。午後一時より重役会を開き、予は営業の概況に付説明し、支店廃合の問題も提出説明せり。仙寿楼に於て夕食を喫し散す。

予記 組合供繭最盛期にて支所三千、本所四千の供繭あり。本年は昨年より一割五分減を予想さる。

社会の今日 信聯保証の五百万円臨時県会あり。

【語句の説明】長野県北信よりの農村救済陳情隊：第六二帝国議会開会直後の六月四日、北信不況対策会（長野県小県・北佐久・諏訪・埴科郡下の不況対策会を統合し結成）の代表者一三名が上京し、翌五日から七日にかけて、農林大臣・内務省警保局長・同地方局長・大蔵省銀行局長・勸業銀行総裁などを歴訪し農村の窮状を訴えた。代表者らは、八日には経済倶楽部の招きを受けて講演を行い、同日帰郷した。

六月二十三日 木曜

晴。組合支所に行きて供繭の状況を視察し、工場修繕の状をも見る。午前十時上飯、銀行へ出勤す。青山と打合して、信聯よりの資金借入に付電話で打合せり。事業資金五万円の申込に付ては此際希望達せられず。四万円の干繭資金中三万円支払はれたしとの事なり、仍て明日支所にて手形を造り三万円支払ふ事とせり。猶中金にては糸代を中金に振込まして貸付を差引く事となるべし等話す。松沢数一來行し、如何にも信聯の威力の減退せし事、松尾組合の状況等につき話あり。頭取欠勤。小池は頭取方にて泊れり。

信也へ学資金五十円及小使七円送金す。放課後近藤代書人を訪問し、

保存登記申請に付印紙料として百七十円預入置たり。

三原屋によりて山口等の借屋の状況を聞くに全部畳建具は付属せず畳、戸等は借家人の私有なる由。近藤福に保存登記を頼みて帰る。

受信 信作。

六月二十四日 金曜

曇、小雨。一般の田植終る。残桑あり。組合へ支所へ行く。午前中支所に於て繭の受状況を見る。廿二日は最盛にして、午後より上飯す。本所に行く。信聯へ出頭し、資金三万円の手形を以て二万九千円余を借入れて内一万円を安田銀行に預金せり。午後一時銀行に出勤せり。

両者共事務輻湊したり。両兎を追ふもの、如く自らも亦自個の身を啜ふ。残金一万九千四百三十三円を組合支所に預けて、本所へ一万円を渡す。江塚を組合へ引込み運動奏効し、江塚大に運動せり。近藤代書人より種々申込みあり、父の土地保存登記出来んとせり。

午後になると睡気と疲労と出て来り頭悪し。

社会の今日 民政党動揺、安達新党組織。

【語句の説明】民政党動揺、安達新党組織：政友会との協力内閣を主張し民政党を脱党した安達謙蔵のグループは、新党の組織を目指して運動を行っていた。これに応じて民政党からはさらなる脱党者が出る事が予想され、分裂は不可避となっていた。

六月二十五日 土曜

曇、晴。組合支所に行き、干燥供繭状況を見るに漸次供繭減少しつつ、あつて、今日迄に総計二万四千貫入荷したるのみ。故に之によりて見るも水田多くなり、供繭も少くなり、夏五千貫秋一万貫と見るも

四万五千貫に出てさるべく、夏挽を以て此供繭を製糸し得るとせば、之によりて工場は一工場を以て足るとし、此際事实上に於て一工場に統一せらるゝ事となるべしと思はる。鯉の子は売行よろしく五百一萬尾を売り尽し得ると青山の話あり。今日殺虫剤を買入れて米の虫殺をするべく葉を注文せり。正午上飯、出勤す。福沢憲和来行し、後妻の話あり。之に關しては金田周旋をなし居れり。放課後蕉梧堂に行きて頭取、原田、金田と共に夕食を共にす。上柳緑来らず。

午後に至れば睡気催し頭腦よろしからず。

久の処へアサヒ軍手は再考すべしと申送る。

電話にて田中土地係と交渉す。

発信 久男。

六月二十六日 日曜

晴。庭を掃除したり、鯉に水をかけてやつたり、ザブリに行つて見たり、小間々々した仕事をして午前中は費へた。終日家居した事は珍らしい。終日家居した。笠原昌之進と云ふ青年が林七六氏の貴族院選挙に付て前島貫一が案内して運動にやつて来た。之に面接した。此問題は金田に一任して運動せしめるべく決して居り、金田も上柳喜右衛門や福沢憲和の委託をうけて投票をまとめるべく奔走して居た。

夕刻与一郎と泰治と作太郎が道路の事でやつて来た。道路の潰地の承認を与へてやつた。政五郎の宅地は道路より西側に作る事に定めてやつた。猶弁天の畑の土をすき取る事に付て右三人と実地を見て其の土をとる事を許してやつた。釣に行つた。多数の釣手が群をなして居て釣れなかつた。

米の殺虫剤を施した。四本のクロールピクリン（一瓶一円三十銭）

を小林薬店より買ふて施した。

組合へは出頭しなかつた。

社会の今日 県は五百万円、信聯保証を通過し、県議上京、県を救ふ運動す。

【語句の説明】笠原昌之進：一八九七～一九五八年。上伊那郡中箕輪村出身。東京の錦城商業学校卒業後、家業の味噌醬油製造業を継いだ。中箕輪村村会議員などの要職のほか、中箕輪村青年会長、上伊那連合青年会長として活躍した。戦後には中箕輪村長を務めた（一九四七～四九年）。

六月二十七日 月曜

曇晴。涼。組合支所から本所へ行つた。市瀬理事を招致して統一社委託蚕種製造に關する監督を依頼した。午前中は組合に居つて種々組合の用事をした。受入繭は二万六千貫余であつた。役場を訪れて本塩助役に会ふて、伊沢収入役が死亡したに付て其の慰勞金を役場から出させる事に付て、父も未亡人から頼まれて村長宛出した。伊沢収入役は模範的収入役であり且長らく勤続したのに対し、未亡人の扶助料を与へるのみで（年金）、一時賜金の恩恵がないので、死亡前千葉の病院へ行き失費も多いから救助してくれと云ふのであつた。本塩助役と村の財政の大様に付ても打合をした。村では經濟調査会を催す予定であつた。農山漁村低利資金の助成金を百七十円計り貰ふて之を特別積立金として置く事とした。役場から父の戸籍抄本を貰ふて近藤代書人へ届けた。午後二時半上飯、銀行へ出勤した。銀行業の事は予には少しのみ込めなかつた。銀行はいやであつた。

近藤代書人を訪問して登記書類を作製（成）せしめた。

予記 村の経済は繭が五万貫と見て二円、十万円。税金か村税二万円、其他六万円と見て八万円。養蚕収入は殆んど他へとられる勘定である。祐次郎と弁天の鋤取土を見て中島に通知した。

社会の今日 県会議員は上京して救済を歎願した。

【語句の説明】 県会議員は上京して救済を歎願した。六月二十七日に上京した長野県会議長宮澤佐源次ら県会議員三五名は、翌二八日県下選出の衆議院議員・小川平吉（政友会）に伴われ、首相官邸において斎藤首相・山本達雄内相・後藤文夫農相に面会した。宮澤議長は、低利資金借入では救えないほど困窮している長野県下農民の実情を訴え、即時救済を求める意見書を提出した。

六月二十八日 火曜

晴。涼。直に銀行へ出勤した。銀行は期末の利息の集金で多忙であった。利息の集金は最も悪かつた。一般の農民には金はないのみならず、思想は堅実味か失せて借金は棒引論、農村モラトリアム等の暴論か吐かれて居る。人心は借金等は返すのは莫迦だと考へて居り、年貢等も不払をきめ込んで居る。従て銀行の利息はなか／＼集まらない。最後の法的手段に出て辛ふして取れると云ふわけである。中には隠蔽する事も巧になつて財産を隠蔽して取り立て不可能とする。農村は最も不況の底に沈淪して居る。銀行の窓より眺めた外界は恐ろしいものであつた。〔中略〕。県会議員が上京、首相等に救済を歎願した。杉原産組課長が来飯したので宿舎を訪ねたが不在であつた。山口氏の次女（三女？）は其の別荘でダンスの師と心中したとの新聞が出た。

発信 山口英九郎。久保田栄次郎。  
社会の今日 満洲国関税の独立。地方官移動。

【語句の説明】 ①満洲国関税の独立：関東軍は満洲国の建国工作において、最大の財源となる関税収入を得るべく中国東北諸港の海関接収を計画した。国民政府にとつても関税収入は重要な財源であつたことから、英米の干渉を考慮した政府・外務省は慎重な姿勢を示した。しかし、六月二五日、国民政府財政部長宋子文による大連海関稅務司福本順三郎の罷免が発表されると、満洲国は交渉決裂とみなして、同二七日に各海関の接収を断行すると発表した。

②地方官移動：一九三二年六月、山本内相が行つた地方長官の大異動のこと。六月二七日、二八府県の知事と本省部課長三名を異動させる原案が大蔵大臣高橋是清・文部大臣鳩山一郎・鉄道大臣三土忠造ら政友会出身閣僚に提示された。翌二八日の閣議では、政友会出身閣僚の反対によつて紛糾した結果、原案を一部修正して可決、同日発令された。また、同時に官吏身分保障案の具体化が合意された。

六月二十九日 水曜

晴。涼。すさみ行く人心、不況の極に沈淪する農村。好転の気配は見へずして人心萎靡し、独力を以て堅忍不拔の精神を有するもの稀なり。此時に際して身を挺して立つべき時は来た。近來覇気が自ら消せ行くが如く感ず。精神衰弱の然らしむる処なると思ふ。

組合支所に於て松田等と話し、松下カゴヤが来組し魚ヅクを作り来り、金八十銭を投して求む。井深竹松を呼びよせ、彼に増沢との交渉を依頼す。先に手付金として差入ある三千元を次の器械購入にヨシ次く事とする件につき、彼をして交渉せしむ。統一社へ蚕種を依託して製造せしめ之を配布する事につき、統一社の蚕種余り良好ならずとの事にて之れが監督を厳にするの要ありとし、江塚を派して之に任せし

む。

正午上飯、銀行出勤す。犬塚カナへ来行。太田穰一來行せり。

午後八時牛肉を買ひて帰宅せり。

井深竹松に組合と増沢関係を依頼す。

社会の今日 満洲国支那より関税をとる。

〔欄外〕駄科では農村モラトリアムを決議した。

六月三十日 木曜

晴。支所へ行き、試験操糸を見る。増沢商店より降旗来組し話す。

正午出勤す。〔中略〕伊那社に総会ありたるも青山をして派し置けり。予等の辞任問題出てたるが如し。銀行の半期決算日なれば店頭多忙に付、午後十時迄居残り事務を見る。各支店より報告来る。店頭不況の声を聞く。利子集金出来ず。如何にして此局面を打開するかは注意を要する点なり。

今村政一の年貢の金を銀行より付替来り、当座とせり。下田史郎に電話を以て話し、思想史代金を文星堂より決算せしむる事とせり。

銀行に止まらんか組合へ力を注がんかは予の一身上の最大重要事なり。依て産組界に活躍せんとするのが予の念願なり。

社会の今日 安達氏新党組織を声明。

【語句の説明】 文星堂：飯田町所在の文星堂書店。同書店が位置する

広小路商店街一帯は、市街地の中でも繁華な地域として知られ、一

九三一年頃からは「銀座」と称されるようになっていた。